

アートマネジメント人材等海外派遣プログラム

2025年度実施報告書



目次

03	はじめに	台北ビエンナーレ
	事業概要	38 派遣先プログラム概況
04	企画内容	40 ベーシック・プログラム
05	派遣先とプログラムの流れ	42 REPORT 井戸沼 紀美
06	応募状況	44 黒沢 聖覇
		46 和多利 光
	エディンバラ・	ベルリン国際映画祭
	インターナショナル・フェスティバル	48 派遣先プログラム概況
08	派遣先プログラム概況	50 ベーシック・プログラム
10	ベーシック・プログラム	52 REPORT 中馬 康輔
12	REPORT 篠原 美奈	54 全 辰隆
14	張 藝逸	56 早川 史也
16	野田 光汰	58 報告会
	サンパウロ・ビエンナーレ、イニョチン	59 総括-今後に向けて
18	派遣先プログラム概況	
20	ベーシック・プログラム	
22	REPORT 木村 こころ	
24	須藤 菜々美	
26	檜山 真有	
	ソウル・パフォーミング・アーツ・フェスティバル	
28	派遣先プログラム概況	
30	ベーシック・プログラム	
32	REPORT 河野 遥	
34	木村 友哉	
36	松尾 加奈	

はじめに

東京都は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のレガシーの反映や、新型コロナウイルス感染症の影響、持続・共生社会へのシフト、デジタル化の進展など、社会環境が大きく変化しているタイミングを捉え、2030年度までの東京都の文化行政の方向性や重点的に取り組む施策を示した「東京文化戦略2030 ～芸術文化で躍動する都市東京を目指して～」を公表した。

東京文化戦略2030では、4つの戦略の1つ「国内外のアートシーンの中心として、世界を魅了する創造性を生み出す ～芸術文化のハブ機能を強化する～」において、東京の芸術文化の発信力を高め、将来的に世界から多くの芸術文化関係者、インバウンドを惹きつける都市となることを目指す「海外発信プロジェクト」を掲げており、アートマネジメント人材等海外派遣プログラムを、その中に位置付けている。

これまでも都は、創造活動に対する助成や、展覧会や公演など発表の場の提供を通じて若手アーティストを支援し、コロナ禍においても、渡航制限をはじめ多くの制約がある中で、デジタル技術を活用した発表の場・交流機会の確保など支援策を展開し、多くの才能を発掘してきた。こうした経験を活かしつつ、今後更に世界に通用する作品を生み出

すとともに、その価値や芸術性をより広く届けていくためには、芸術文化を支える演出家やプロデューサー、キュレーター等のアートマネジメント人材の育成も欠かせない、こうした課題認識のもと、令和5年度から新たに本プログラムを開始した。

本プログラムは、①世界最先端の演出や舞台技術、作品や展示手法等に直に触れる、②第一線で活躍する海外の専門人材との人脈づくり、の2つの目的を柱として、海外の著名な芸術文化機関やシアター、芸術文化フェスティバルに概ね1週間程度派遣を行うものであるが、国内で活躍されている専門家からの協力を得ることで、派遣先の調整やキーパーソンとつないでいただくなど、個人では得難い有意な体験の提供を実現することが出来た。

今年度は5か国に計15名を送り出したが、各々が獲得した知見やネットワークを派遣参加者の中だけに留めるのではなく、共有・集積していくことで、未来の東京の芸術文化を牽引する、意欲溢れる若者たちの海外への挑戦を後押しするものになると考え、本報告書のとりまとめを行った。

本プログラムが、国際的な視点を持ったアートマネジメント人材等の育成に寄与し、東京から世界を魅了する作品を生み出し発信していく第一歩となれば幸いである。

事業概要

企画内容

主旨

—

- ・ 将来アーティストと社会をつなぐ役割を担う若手アートマネジメント人材を短期で芸術フェスティバル等に派遣し、国際的な活動の第一歩となるよう、海外の芸術文化関係者とのネットワークを作る機会を提供する。
- ・ 海外の先駆的な作品や創作現場に直に触れることで、国際的な視点に立った創作の機運醸成を図る。
- ・ 将来的にはこの事業を通じて東京と各派遣先との連携を深め、東京と海外セクターとのネットワーク構築・強化につなげる。

派遣対象者

—

連携する派遣先に準じて、対象となる芸術分野を選定。

- ★ 舞台芸術分野（演劇、舞踊、音楽等全般）に関わるプロデューサー、ディレクター、舞台技術者等
- ★ 視覚芸術分野に関わるディレクター、キュレーター等アートプロフェッショナル等（映画含む）

各分野ともに以下の条件に全て当てはまることとする。

- ・ 海外での公演や、海外セクターとの交流や共同制作などに興味があり、海外での実務経験がない・あるいは少ないこと
- ・ 芸術分野関連の現場経験が3年以上あること
- ・ 本プログラムに参加した成果を今後の活動に活かす意思があること
- ・ 首都圏在住者で都内での活動を主としていること
- ・ 第2次選考（面接）時点で必要な残存期間のある有効なパスポートを所持していること

プログラム

—

約1週間の滞在中のプログラムとして、主催者側で設定するベーシック・プログラムと、派遣参加者自身が調整して設定するオリジナル・プログラムを設定。いずれも、派遣決定後に、主催者と協議しながら決定。

【ベーシック・プログラム】

主催者側で調整し設定する共通プログラム。現地での面会先や視察先を主催者側が調整。滞在中、必ず実施するプログラム。

【オリジナル・プログラム】

派遣参加者が自らリサーチし、企画・調整するプログラム。派遣決定後、各自で事前に派遣先のリサーチを行い、また、関係各所視察・ヒアリング先を検討・調整して実施するプログラム。

支援内容

—

- ・ 日本と派遣先の往復航空賃（エコノミークラス）
- ・ 現地宿泊費
- ・ 日当：現地滞在1泊につき1万円
- ・ 海外旅行保険
- ・ その他、派遣先でのスケジュール・プログラムの調整、現地での関係者の紹介、アドバイスなどのサポート

派遣先とプログラムの流れ

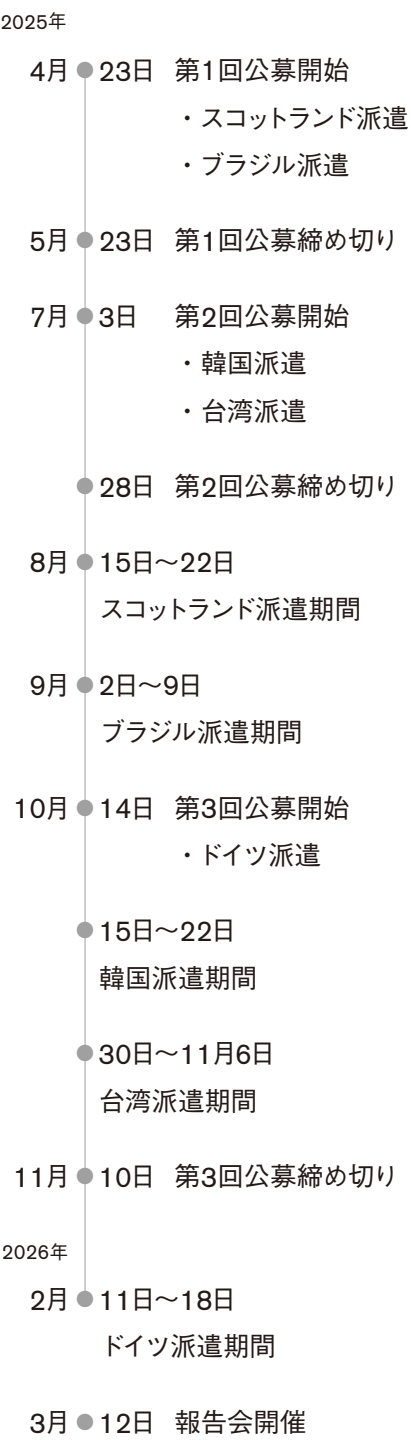
3年度目となった本年度は、昨年同様、派遣先の地理的バランスを考慮し、かつ舞台芸術分野と美術分野に加え、映画分野を新たに追加した3分野を対象として派遣先を選定し、結果として「エディンバラ・インターナショナル・フェスティバル」（以下スコットランド派遣）、「サンパウロ・ビエンナーレ、イニョチン」（以下ブラジル派遣）、「ソウル・パフォーミング・アーツ・フェスティバル」（以下韓国派遣）、「台北ビエンナーレ」（以下台湾派遣）、「ベルリン国際映画祭」（以下ドイツ派遣）の5カ所への派遣となった。

申請状況について

申請についてスコットランド派遣に28名、ブラジル派遣に14名、韓国派遣に8名、台湾派遣に5名、ドイツ派遣は42人の応募があり、今年度応募者数は全体として延べ97名、平均年齢33.4歳となった。当事業は海外での活動経験の少ない若手を想定しているが、全体として、いずれの派遣地においても30代前半～半ばを中心とした若手～中堅層の応募が多く、国内で一定の実務経験を積みつつ、次のステップとして国際的な知見やネットワークを求める層からのニーズが強いことがうかがえる。

昨年度同様、アジア圏のフェスティバル派遣については、アジアの地域性や文化的背景を踏まえた明確な問題意識や目的意識を持ち、距離的に近いことから今後アジアでの活動の拡大を目指す層が集まる傾向がある。一方でブラジル派遣については、地理的距離・文化的差異の大きさを踏まえたうえでの応募であることから、フェスティバルへの関心の高さがうかがえ、自身の海外での活動の幅の充実・拡大を目指す申請が多かった。また今年度から新しく映画祭が派遣先に加わったが、映画祭派遣の申請者は既に様々な海外活動を実践している若手が目立った。

事業概要



申請者の属性 (数字は人数)

スコットランド		
応募総数:28名		
年代別		
50歳以上	1	
40～49歳	6	
35～39歳	5	
30～34歳	4	
25～30歳	10	
24歳以下	2	
平均年齢		
	34歳	
分類別		
演劇	17	
舞踏	4	
音楽	5	
美術	1	
映画	0	
その他	1	
職種別		
プロデューサー・ディレクターが主	21	
キュレーター・プログラマーが主	0	
俳優・ダンサー等アーティストが主	5	
その他	2	
英語レベル		
Beginner (初級)	8	
Intermediate (中級)	9	
Proficient (上級)	7	
Fluent (堪能)	0	
Native (ネイティブ)	4	

ブラジル		
応募総数:14名		
年代別		
50歳以上	1	
40～49歳	3	
35～39歳	1	
30～34歳	4	
25～30歳	5	
24歳以下	0	
平均年齢		
	35歳	
分類別		
演劇	0	
舞踏	1	
音楽	0	
美術	12	
映画	0	
その他	1	
職種別		
プロデューサー・ディレクターが主	8	
キュレーター・プログラマーが主	4	
俳優・ダンサー等アーティストが主	0	
その他	2	
英語レベル		
Beginner (初級)	1	
Intermediate (中級)	8	
Proficient (上級)	2	
Fluent (堪能)	3	
Native (ネイティブ)	0	

韓国		
応募総数:8名		
年代別		
50歳以上	0	
40～49歳	1	
35～39歳	0	
30～34歳	3	
25～30歳	2	
24歳以下	2	
平均年齢		
	30歳	
分類別		
演劇	7	
舞踏	0	
音楽	1	
美術	0	
映画	0	
その他	0	
職種別		
プロデューサー・ディレクターが主	6	
キュレーター・プログラマーが主	0	
俳優・ダンサー等アーティストが主	1	
その他	1	
英語レベル		
Beginner (初級)	4	
Intermediate (中級)	0	
Proficient (上級)	2	
Fluent (堪能)	1	
Native (ネイティブ)	1	

台湾		
応募総数:5名		
年代別		
50歳以上	0	
40～49歳	1	
35～39歳	1	
30～34歳	2	
25～30歳	1	
24歳以下	0	
平均年齢		
	34歳	
分類別		
演劇	0	
舞踏	0	
音楽	0	
美術	5	
映画	0	
その他	0	
職種別		
プロデューサー・ディレクターが主	1	
キュレーター・プログラマーが主	4	
俳優・ダンサー等アーティストが主	0	
その他	0	
英語レベル		
Beginner (初級)	1	
Intermediate (中級)	2	
Proficient (上級)	0	
Fluent (堪能)	2	
Native (ネイティブ)	0	

ドイツ		
応募総数:42名		
年代別		
50歳以上	1	
40～49歳	8	
35～39歳	7	
30～34歳	16	
25～30歳	8	
24歳以下	2	
平均年齢		
	34歳	
分類別		
演劇	1	
舞踏	0	
音楽	1	
美術	1	
映画	36	
その他	3	
職種別		
プロデューサー・ディレクターが主	29	
キュレーター・プログラマーが主	3	
俳優・ダンサー等アーティストが主	4	
その他	6	
英語レベル		
Beginner (初級)	8	
Intermediate (中級)	13	
Proficient (上級)	8	
Fluent (堪能)	12	
Native (ネイティブ)	1	

エディンバラ・ インターナショナル・ フェスティバル



派遣先プログラム概況

【派遣先について】

エディンバラ・インターナショナル・フェスティバル
スコットランドのエディンバラで開かれるパフォー
ミングアーツの祭典。1947年に創設されて以来、
クラシック音楽・オペラ・演劇・ダンスなどの高水
準なパフォーミングアーツを世界中から招く「招
待制(キュレーション型)」プログラムとして知ら
れる。この祭典は、戦後復興期に芸術を通じて
世界の文化交流を図る目的で設立され、当初は
「International Festival of Music and Drama(音
楽と演劇の国際祭)」としてスタートし、徐々にオペ
ラや舞踊・講演など幅広いプログラムへ拡大した。

エディンバラ・フェスティバル・フリンジ

1947年、公式のエディンバラ・インターナショナル・
フェスティバルに招かれなかった8つの劇団が独
自に公演を行ったことから始まり、以後、参加者が
年々増え、現在では数千の公演が数百の会場で同
時開催されるなど、世界中のアーティストが集う国
際的イベントに発展している。オープンアクセス制
を採用し、審査や選考なしで誰でも公演を登録で
き、新進アーティストの登竜門としても知られる。



【概要・趣旨】

エディンバラ・インターナショナル・フェスティバル
及びフリンジの視察を中心に、フェスティバル関係
者や公的機関関係者とのミーティング、関連施設
の視察などを行う。その他、エディンバラ城内で開
催されるミリタリー・タトゥー(軍楽隊の分列行進の
ショー)や街中のいたるところで繰り広げられる大
道芸人パフォーマンスなど、多角的に芸術祭を体
験するとともに国際的なネットワークの構築を目的
とする。



【派遣対象】

舞台芸術(演劇、舞踏、音楽等全般)に関わる若手
を中心とするプロデューサー、ディレクター、技術
者等

【派遣期間(現地滞在)】

2025年8月15日～22日

【プログラム・アドバイザー】

須藤 千佳 SUDO Chika

ブリティッシュ・カウンシルアーツ部長

国際基督教大学卒業後、メーカー勤務を経て2001年に
渡英。ロンドン大学大学院にて修士号を取得。2005年
より英国の公的な文化交流機関ブリティッシュ・カウン
シルで20年以上に渡ってアートを通した日英間の文化交
流プログラムに従事。アートと社会課題(障害や高齢社会
等)、アートとテクノロジーといった分野で、日英の芸術文
化やクリエイティブ産業の関係者の対話、協働を推進して
いる。2022年より現職。



ベーシック・プログラム

※派遣参加者全員に必ず参加してもらう共通プログラム

視 察

【演目】Military Tattoo

【会場】Edinburgh Castle Esplanade

【内容】軍楽隊パレードやダンス、パフォーマンスを組み合わせた大規模野外ショー。世界中から観光客を集める、エディンバラを代表する夏の恒例イベント。



視 察

【演目】Cutting the Tighrope

【会場】Church Hill Theatre

【内容】英国舞台におけるパレスチナ問題への沈黙への応答として創作されたこの政治劇集は、新たな緊迫感をもって国際フェスティバルに登場した。「昨年、イングランド芸術評議会は芸術団体とその関係者に対し、露骨な政治的・活動家的な発言を控えるよう警告した。この短編劇集は、その瞬間への緊急の芸術的応答であり、現代の世界情勢、政治的抵抗、芸術的自由をめぐる対話における芸術の力を大胆に探求する」—ニコラ・ベネデッティ（フェスティバルディレクター）



Photo: Cutting The Tighrope© David-Monteith-Hodge

視 察

【演目】Mary, Queen of Scots

【会場】Festival Theatre

【内容】スコットランド・バレエ団が贈る、スコットランドを代表する女性の一人の物語。ルネサンスとパンクが交錯する舞台。イングランド女王エリザベス1世とスコットランド女王メアリー、二人の女王の複雑な関係性が描かれる。スコットランド・バレエ団のレジデント振付家ソフィー・ラプレーンと共同創作者のジェームズ・ボナスによる世界初演作品。



ミーティング

【訪問先】クリエイティブ・スコットランド

【ヒアリング】Lorna Duguid（多分野芸術プログラムマネージャー／クリエイティブ・スコットランド）、Norah Campbell（ブリティッシュ・カウンシル・スコットランド芸術部門責任者）

【内容】スコットランドにおける文化政策の中核を担う二つの機関の代表者と、国際フェスティバルの運営、及び文化外交戦略について包括的な意見交換を行った。



ミーティング

【訪問先】Fringe Shop

【ヒアリング】Matt Lord（アーティスト支援・プロジェクトマネージャー、フェスティバル・フリンジ協会）

【内容】スコットランドの文化政策の中心的機関において、EDI (Equity, Diversity, Inclusion) の実施状況についてヒアリングを行った。



ネットワーキング

【訪問先】Reception for British Council Delegation organized by British Council

スケジュール

● ベーシック・プログラム ● オリジナル・プログラム

Day 1	AM	● エディンバラ着
	PM	● Kathryn Gordon: A Journey of Flight@Dance Base鑑賞 ● Rising Stars: Classical Jam@The Hub鑑賞 ● Military Tattoo@Edinburgh castle Esplanade鑑賞
Day 2	AM	● Macbeth @ZOO Southside鑑賞 ● トークイベント参加 Ash Sarkar: Immigrants Aren't Eating Your Pets @Courtyard Theatre
	PM	● Orpheus and Eurydice@Edinburgh Playhouse鑑賞 ● Cutting the Tighrope@Church Hill Theatre鑑賞
Day 3	AM	● プロモーションセッション参加 Shine Your Work@Fringe Central ● ネットワーキング参加 Fringe Marketplace@Greyfriars Hall ● National Gallery視察
	PM	● Mary, Queen of Scots@Festival Theatre 鑑賞 ● Arcade@Pleasance Dome鑑賞 ● Enjoy Your Meal@Summerhall鑑賞
Day 4	AM	● ヒアリングLorna Duguid (Multi-artform Manager, Creative Scotland), Norah Campbell (Head of Arts, British Council Scotland)
	PM	● Shostakovich Inside Out@Usher Hall鑑賞 ● レセプション参加 British Council Delegation organized by British Council参加
Day 5	AM	● ヒアリングMatt Lord (Artist Support and Projects Manager, Festival Fringe Society)
	PM	● The Nature of Forgetting鑑賞 ● ヒアリング Clare (Music Officer at Creative Scotland) ● Bolero@Dance Base鑑賞 ● Dementia-friendly concert@Queen's Hall鑑賞
Day 6		● through warm temperatures@Dance Base鑑賞 ● Last Rites-Here&Now Showcase@Plewsance鑑賞 ● The Legends of Them-Here&Now Showcase@Zoo鑑賞 ● Breaking Back@Asher Hall鑑賞
Day 7	AM	● Japan Selection日本人演劇関係者のネットワーキング参加 ● エディンバラ城視察
	PM	● Bernstein & Stravinsky鑑賞 ● The Fahrenheit Alliance V+talk with Hirai鑑賞
Day 8		● 帰国

※オリジナル・プログラムは各自異なるため、一例として掲載をしています。



篠原 美奈 SHINOHARA Mina
アートマネージャー

東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。同大学院国際芸術創造研究科修了、博士課程在籍。クラシック音楽家を中心にまちなかで新たな表現を模索するコレクティブ「あちらこちら」を主宰。2024年より「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」でコーディネーターを務めるほか、音楽やアートプロジェクトの現場で制作/アートマネージャーとして活動する。

オリジナル・プログラム

クリエイティブ・スコットランドの 音楽オフィサー Clare Hewittさんを訪問

エディンバラ・インターナショナル・フェスティバル（EIF）の音楽プログラムを中間支援組織の視点からどのように捉えているのかについて伺った。あわせて、スコットランドにおける小規模な音楽コミュニティ同士の密接なつながりについてもお話を伺い、アーティスト間の交流機会の創出や、福祉・教育分野への橋渡しを重視する姿勢について理解を深めた。

コミュニティ音楽家 Jane Bentleyさんと交流

5年以上にわたり認知症の方に向けて行われてきた音楽ワークショップの実践や、リハーサルした演奏内容と即興を組み合わせ、オーディエンスを巻き込む音楽の立ち上げ方について、実践者の視点からお話を伺った。

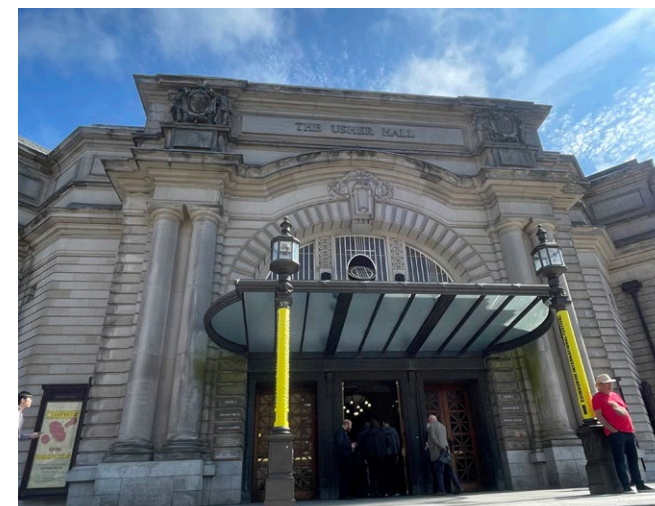


JaneさんとScottish National Portrait Galleryにて

印象に残ったプログラム

古典を扱いながら現代性を探る、 様々な切り口のコンサートを視察

EIFの多様な音楽公演を鑑賞し、過去の作品を題材としながらも聴衆との関わりや実験的な演出、他分野との協働を通して「なぜ今この作品を演奏するのか」を意欲的に提示する3つの公演が印象に残った。元教会の建物で行われた「Rising Stars: Classical Jam」（室内楽）では、観客のリクエストに応じて楽曲が演奏され、「Shostakovich Inside Out」では、指揮者が《交響曲第5番》の背景を語りながら楽章やフレーズごとに演奏が行われた。「Breaking Bach」では、古楽アンサンブルによるバッハの音楽にヒップホップやコンテンポラリーの振付が施され、それぞれの面白みや関係性を新たな視点から捉える試みであると感じた。



「Shostakovich Inside Out」や「Breaking Bach」が開催されたThe Usher Hall

派遣プログラムを終えて

今回の視察で最も着想を得たのは「The Nature of Forgetting」（フリンジ公演）という生演奏によるフィジカルシアターで、非言語的な表現の中に明確なストーリーの軸と想像の余白があり、認知症をテーマにしながらも前向きなメッセージを提示するアプローチに感銘を受けた。また、日本では触れる機会が少なかった政治的題材を扱った演劇公演を鑑賞し、同行した2人と感想を語った時間も印象に残っている。社会的・政治的な文脈へと観客の意識を開いていく演劇公演と、あくまで楽曲に内在する価値をいかに開くかを重視する音楽公演の対比から、演奏会やフェスティバルとしての音楽公演が担える可能性について、俯瞰的に考えるきっかけとなった。



「The Nature of Forgetting」のチラシ



張 藝逸 ZHANG Yiyi

企画構成(プロデュース)

立教大学映像身体学科卒業後、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科修士課程修了、現在博士後期課程に在籍。多文化協働演劇とコミュニティベースの実践を研究しながら、プロデューサー・ドラマトゥルクとして活動。2024年、多文化協働による多言語演劇『The WORLD』を企画・構成した。2025年、東京芸術劇場「Tokyo Borderless Theatre Project」にてワークショッププロダクション作品を企画・創作した。

オリジナル・プログラム

クリエイティブ・スコットランド本部にて Kim Simpson氏(EDI責任者)と面会

スコットランドの文化助成制度における多様性・公平性・包摂性(EDI)政策についてヒアリングを行った。助成審査へのEDI評価項目の組み込み方、障害者アーティスト支援プログラム、移民・難民の文化参加促進策、組織内部の多様化施策などについて詳細な説明を受け、日本の文化政策を考え直すきっかけとなった。

Fringe Marketplaceや Asian Arts Awardに参加

世界各国のアーティストやプロデューサーと交流した。海外フェスティバルでの上演における共通課題(上演期間、コスト、広報戦略など)について情報交換を行った。また、アジア地域における国際文化交流の支援体制についても意見交換を行い、今後の協働の基盤となるネットワークを構築した。



EDI担当者との面会

印象に残ったプログラム

同時開催の複数フェスティバルに参加

Book FestivalでのTa-Nehisi Coatesのトークイベントに参加した。彼が語った「重い歴史を見つめ続けることから生まれる希望」という言葉が印象に残った。同じ日にEIFで観た演劇『Cutting the Tightrope』もまた、移民と表現の自由をテーマにした作品であり、Coatesのトーク内容がアフタートークでも取り上げられていた。8月のエディンバラでは複数のフェスティバルが同時開催されており、各フェスティバルは独立して運営されているが、観客は都市を歩きながら自然と複数のプログラムを横断して体験する。同じ時期・同じ都市で開催されることで相乗効果が生まれている。フェスティバルのアートマネジメントにおいて、単独の企画だけでなく、都市全体のなかでの位置づけを意識することの重要性を学んだ。



Ta-Nehisi Coatesトーク会場

派遣プログラムを終えて

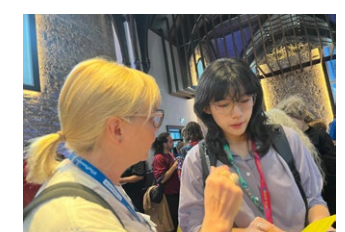
多文化協働演劇の研究者・実践者として、芸術文化活動における多様性・包摂性政策と運営のあり方を学ぶことを目的に参加した。世界各国から集まった先端的・実験的な作品を観て、アーティストや制作者の話を直接聞くことができたのは貴重な経験であった。また、都市全体で複数のフェスティバルが響き合う環境は、日本のフェスティバルのあり方を再考するきっかけとなった。帰国後、本派遣での経験を踏まえ、東京芸術劇場「Tokyo Borderless Theatre Project」にて、海外ルーツを持つ参加者と作品を創作し、11月に発表した。今後も本派遣で得た知見と人脈を活かし、活動を続けていきたい。



当地アーティストとの交流



原住民による自然とのパフォーマンス



フリンジで他国のプロデューサーと交流



野田 光汰 NODA Kota
演出家、劇作家、プロデューサー

2019年に劇団人間の条件を設立。音楽を起点にして身体性にフォーカスし、現代的感觉に基づいた古典のテキストの演出を行う。2023年には「条件の演劇祭vol.1-Kabuki」のフェスティバル・ディレクターを務め、2024年には津久井やまゆり園事件を題材にした『The Human Condition』を上演し、現代的な問題に向き合う新たな作品制作に踏み出した。

オリジナル・プログラム

Edinburgh Festival Voluntary Guide Allianceのメンバーへのインタビュー

EFVGAのエリック氏らに対し、地域住民とフェスティバルの関わりについてインタビューを行った。エディンバラ市民は混雑や騒音、物価上昇といったデメリットを感じながら、国際的な文化経験や経済的恩恵などのメリットを高く評価している。多様性を誇りに思う住民が多く、フェスティバルへの反対運動は起きていないという。

As You Like It A Radical Retelling (by Crow's Theater)

カナダのカンパニーによる作品。シェイクスピア作品を期待する観客を前に、ランドアクノリッジメントを切り口にして先住民への文化的ジェノサイドに対する怒りを語り続ける、スタンドアップコメディ風のモノローグが展開された。上演内容を拒絶して離席する客も相次いだ。最後には多くの観客がスタンディングオベーションを送った。滞在中でもっとも刺激的な作品だった。

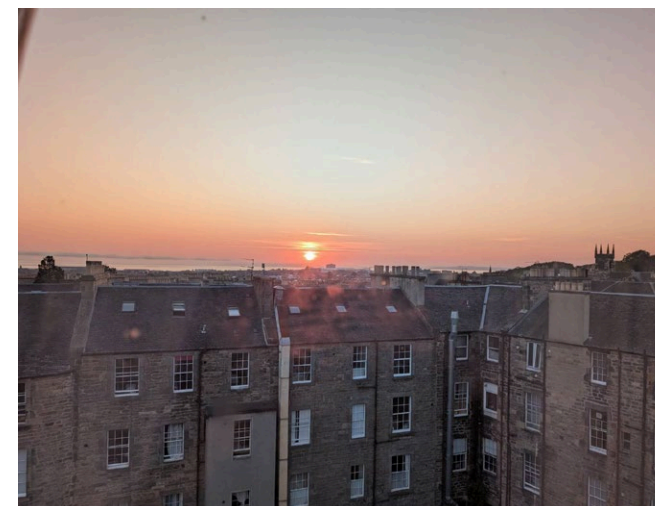


Crow's TheaterによるAs You Like It

印象に残ったプログラム

エディンバラ街歩き

初日に街歩きをしてみたことは、このフェスティバルを理解するうえで大きな助けとなった。まず、このフェスティバルが持つ、街を巻き込む力の源泉はフリンジの活力と、飲食店や大道芸といった世俗的な環境だとわかる。こうした賑わいがあるからこそ、EIFのハイカルチャーな演目が、バランス良い特権性を享受できる。また、街の構造も重要だ。フェスティバル期間中は中心の旧市街部を車両禁止にして会場や店舗を集中させることで、密度の高い空間を生み出している。旧市街の街並みの特別さが祭りの特別さと直結し、徒歩20～30分で回れるサイズ感や立体的町並み、近隣の自然がもたらす清浄な空気感も、探索の楽しさと演出効果を支えている。



ホテルから見たエジンバラの朝日

派遣プログラムを終えて

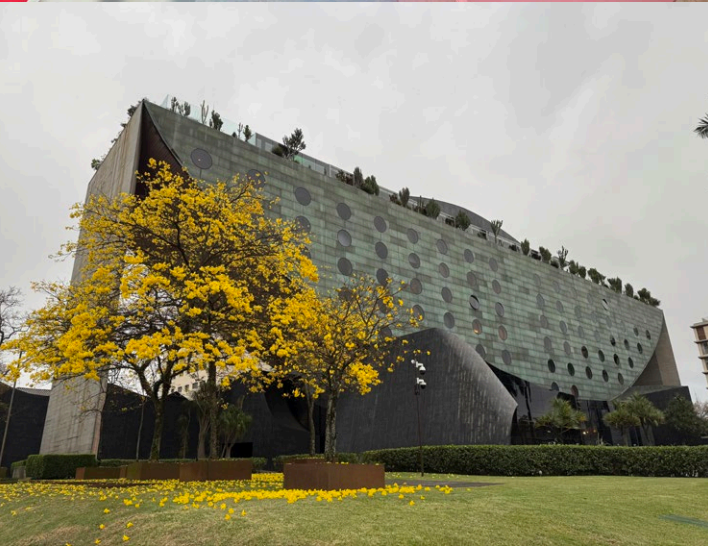
本プログラムへの参加目的は、街の風景を変えるフェスティバルのエコシステムを調査することであった。当初は地域住民とのつながりが規模の源泉だと考えていたが、実際には観光やフリンジ参加者の自発的なエネルギーが街を変容させ、その結果として住民や多様な商売を巻き込む「規模が規模を呼ぶ」仕組みを体験した。

エディンバラでは、圧倒的な規模のフリンジと、質の高いキュレーションを担うEIFが住み分け、相互補完的に公共性を構築している。この効率的なシステムは、パフォーミングアーツが経済的側面から公共圏を切り拓く可能性を示しており、今後自分がかかわっていききたい、パフォーミングアーツの仕組み作りにおける重要な参照項となった。



ホテル近くの丘から望むArthur's Seat

サンパウロ・ ビエンナーレ、 イニョチン



派遣先プログラム概況

【派遣先について】

サンパウロ・ビエンナーレ

ブラジルのサンパウロ市で開催されている現代美術の大規模国際展覧会。2年に1度、世界中から招待された美術家らがサンパウロ市内の会場で作品を展示するもので、ヴェネツィア・ビエンナーレ(イタリア)やドクメンタ(ドイツ)と並ぶ世界の重要な国際美術展のひとつである。

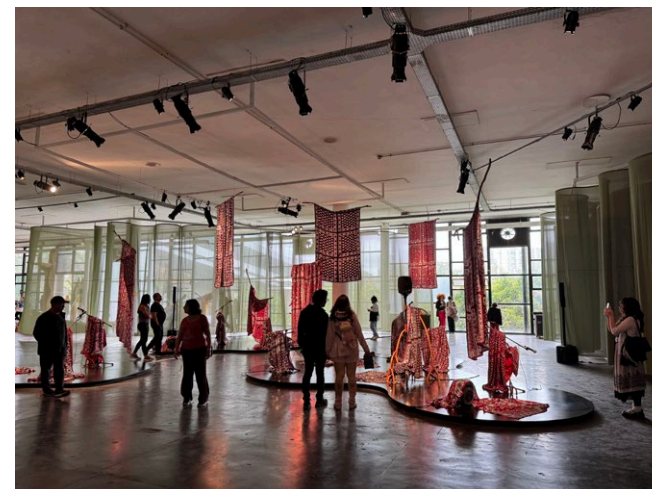


INHOTIM(イニョチン)

サンパウロから北東におよそ500km離れたブラジル第4の都市ベロオリゾンテ市の南西60km、サンパウロからは車で10時間の距離にある、世界最大の野外美術館。140ヘクタールの広大な敷地は植物園にも認定されており、地球上全大陸の4500種の植物が見られる。開館は2006年。現在はブラジルを含む30か国以上のアーティスト250名以上の作品、1300点余りが収集され、企画展ごとに500点ほどが展示されている。現代美術の主要作家の作品は屋外及び23のギャラリー・パビリオンに常設され、中でも草間彌生の作品「Aftermath of Obliteration of Eternity」はインスタレーションを丸ごと購入しパビリオンを設置している。

【概要・趣旨】

現代美術展として国際展の中でも「ヴェネツィア・ビエンナーレ」に次いで世界で2番目に歴史が長く、全世界の美術界の注目を集める「サンパウロ・ビエンナーレ」と、現代アート作品を植物園に配した世界最大級の野外美術館「イニョチン」を派遣先とし、現代美術関係者との面談や展覧会及び施設視察を通じて、派遣参加者が最先端の作品・作家と触れ合い、ネットワーキング構築につなげることを目的とする。



【派遣対象】

視覚芸術に関わる若手を中心とするキュレーター、ディレクター、アートプロフェッショナル等

【派遣期間(現地滞在)】

2025年9月2日～9月9日

【プログラム・アドバイザー】

神谷 幸江 KAMIYA Yukie

国立新美術館学芸課長

ジャパン・ソサエティー(NY)ギャラリー・ディレクター、広島市現代美術館学芸担当課長、ニューミュージアム(NY)アソシエイト・キュレーターを歴任。第12回上海ビエンナーレ(2018-2019)共同キュレーターを務めた。「時代のプリズム:日本で生まれた美術表現1989-2010」(国立新美術館、2025)、「荒野のラジカリズム:グローバル1960年代の日本の現代美術作家たち」(ジャパン・ソサエティー、2019)をはじめ国内外で展覧会を手がける。西洋美術振興財団学術賞を受賞、美術評論家連盟会員。



Photo by Reggie Shiobara

ベーシック・プログラム

※派遣参加者全員に必ず参加してもらう共通プログラム

イニョチン

視察・ミーティング

【訪問先】INHOTIM（イニョチン）

【ヒアリング】Marina Toledo (PR担当)、Marilia Loure Iro (美術部門キュレーター)、Vinicius Santos (エデュケーション担当)

- ・施設の成り立ちや運営体制全般について
- ・教育やエデュテインメントを通じた地域とのかかわりについて
- ・自然とアートの融合、専門性の異なるスタッフの協働体制について
- ・将来に向けた持続可能なキュレーションの展望について



サンパウロ

視 察

【訪問先】サンパウロ美術館 (MASP)

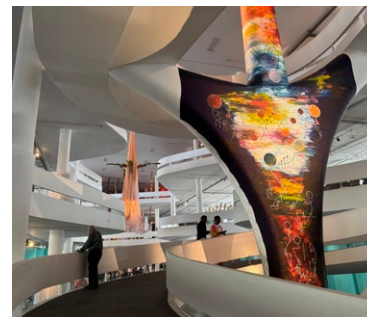
【施設概要】MASPは、南半球屈指の美術館としても知られている。中世から現代に至る各時代の西洋美術の名品を数多く収蔵していて、アメリカ合衆国及びヨーロッパの美術館以外で、これほど質が高くまとまった西洋美術のコレクションを持つ美術館は他にないため「奇跡の美術館」とも称されている。視察日は本館隣に建築された新館のオープン記念特別展『Histories of Ecology』招待日でもあり深夜24時まで大盛況であった。



視 察

サンパウロ・ビエンナーレ

- ・36回目を迎えた国際美術展は120組のアーティストが参加し、およそ4ヶ月間の会期中無料で公開された。
- ・プレオープニングデイ (9/5) 及びインターナショナル・ウィークエンド (9/6, 7) に参加。
- ・世界各国から招待された40名のインターナショナルゲストがガイドツアーで会場を視察。キュレーター、アーティストと直接交流できる貴重な機会となった。



視 察

【訪問先】サンパウロ州立美術館 (PINACOTECA)

【施設概要】1905年に開館した州立美術館。19世紀以降の特にブラジルの近現代作家の作品を中心にコレクションを有している。

Luz公園内の隣接地に現代美術絵画館Pina Contemporaneaが2023年に開館。共にサンパウロでは最も充実した教育プログラムを展開。



ミーティング

【訪問先】サンパウロ美術館 (MASP)

【ヒアリング】Regina Teixeira De Barros (コレクション責任者兼チーフキュレーター)

- ・MASPの体制とコレクションポリシーについて
- ・民間設立美術館として所蔵品の多くが寄付や委託であることから、コレクション諮問委員会を設置してクオリティとバランスを考慮しつつ間の特徴を維持していること



スケジュール

● ベーシック・プログラム ● オリジナル・プログラム

Day 1	AM	●	サンパウロ着
	PM	●	Instituto Tomie Ohtake視察
		●	サンパウロ〜ベロオリゾンテへ移動
Day 2		●	Inhotim 視察・関係者ヒアリング
Day 3	AM	●	ベロオリゾンテ〜サンパウロへ移動
	PM	●	LUIZA STRINA Gallery訪問
		●	ZIPPER GALERIA訪問
		●	MASP (サンパウロ美術館) 視察
Day 4	AM	●	サンパウロ・ビエンナーレ視察 (1日目)
	PM	●	Museum of Contemporary Art, University of Sao Paulo視察
		●	Museu Afro Brazil視察
		●	ルイ・オオタケによる建築、ホテルユニークを視察
Day 5		●	サンパウロ・ビエンナーレ視察 (2日目)
		●	ゲストツアー参加
Day 6		●	サンパウロ・ビエンナーレ視察 (3日前)
		●	ゲストツアー参加
Day 7	AM	●	PINACOTECA (サンパウロ州立美術館) 視察
		●	PINA_contemporanea (サンパウロ州立現代絵画館) 視察
	PM	●	Mendes Wood DM Gallery訪問
		●	アーティストインレジデンス Canteiro訪問
		●	Almeida & Dale Gallery訪問
		●	Luis Maluf Art Gallery訪問
Day 8	AM	●	ヒアリングMASPコレクション責任者／チーフキュレーター
		●	ブラジル移民博物館 視察
	PM	●	Museum of Sexual Diversity、PIVO視察
		●	サンパウロ発
Day 9		●	サンパウロ〜ニューヨーク移動
Day 10		●	帰国

※オリジナル・プログラムは各自異なるため、一例として掲載をしています。



Photo by
Haruma Yoshida

木村 ころこ KIMURA Kokoro
キュレーター

オランダ・ユトレヒト大学大学院Arts and Society修士課程修了。近年では、Art Collaboration Kyoto 2025のパブリックプログラムやThe 5th Floorでのキュレーションを手がけた。そのほか、MES56を始めとするインドネシアのコレクティブとのプロジェクトにも取り組む。

Pivô、Museum of Sexual Diversityの視察

クィアに焦点を当てる展示を開催していた2施設。誰が来てどのように振る舞うのか、そして誰がどのようにそれに応対するのか、といったきわめてソフトな面から、これらの施設がセーファー・スペースとしても機能していることが明らかになった。複合ビルや駅の構内といった、生活と結びついた場所性を考慮しても、アートを社会から切り離すのではなく、アートを伴った／切り口としたセーファー・スペースとして社会に空間を作っていくという意識を感じた。加えて、会場に学生の団体視察が訪れたり、教育機関としての側面も感じられた。

オリジナル・プログラム

ギャラリー視察 (Casa Triângulo、Luisa Strina、Mendes Wood DM、Zipper Galeria)

各ギャラリーへの訪問を通じて、どの展示も「歴史」という切り口を盛んに参照していたことが明らかとなった。展示作品について語る際に使用される言語に、現代アート用語と歴史への参照が共存していた点は、非営利を含む他の芸術機関と通じるものがあった。ギャラリーといえど、その空間や規模は東京の一般的なギャラリーよりも大きい場合が多く、それゆえに充実感のある展示が多かった印象。このような視点は、ビエンナーレやMASPなど、他の組織を見ていく上での重要な参照・比較項となった。

Museu Afro Brasilの視察

ビエンナーレ会場のあるイビラプエラ公園内に位置する、アフリカ及びアフロ・ブラジリアン文化に特化した美術館にて展覧会を鑑賞した。コレクション展は、特定の分野に焦点を当てるよりも、包括的にアフロブラジリアン文化・社会・歴史を提示しようとするものであった。コレクションを鑑賞することで、現代アフロ系アーティストが用いる独自のビジュアル言語が何を参照しているのか、その手がかりを得ることができ、ビエンナーレとの相補性を感じた。また、過去の企画展を振り返る回顧展では、今日の現代アートシーンで議論される脱植民地的な概念やアイデアが、当時からすでにキュレーションとして実践されていたことに気づかされた。

印象に残ったプログラム

サンパウロ・ビエンナーレにおける「ナレッジ」

展示作家のセレクションやInvocation (召喚) と Conjugation (共学) といった関連プログラムからは、一つの地域や民族において伝統的に守られてきた知恵をローカルナレッジと呼称し、それを蒐集して博覧するという帝国主義的な欲望とは異なるベクトルが感じられた。展示作品も、現代社会におけるモビリティの加速によって経験される、文化やアイデンティティの摩擦に応答する作品が多く見受けられた。「ナレッジがそこにあり、それを理解する」という学習のフレームワークではなく、「ナレッジそのものが可変であり、常に生成・変容していく」というフレーム設定が、今回のキュレーションの特徴と言えると感じた。

派遣プログラムを終えて

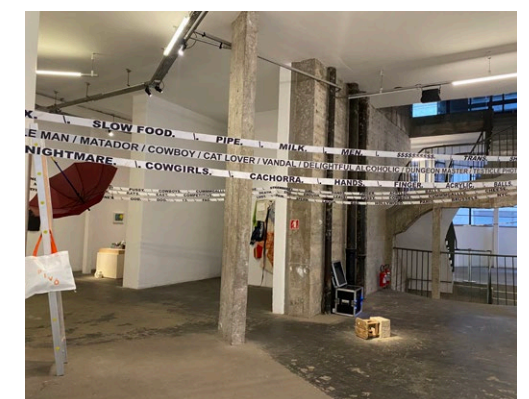
プログラム参加にあたり、ローカルな知識体系にもとづいて世界を語り直す作品やアーティストが世界的に注目される中、サンパウロにおけるキュレーションが、どのようにローカルナレッジを扱うのかを視察したいと考えていた。結果として、ローカルな歴史や社会構造を振り返りながらもその回顧に終始することなく、アートを通じてそれらを再び開き直すことで、「起こり得た」現実を立ち上げようとする態度を感じた。加えて、キュレーターが他分野の研究者と長期的に協働する環境も印象深かった。今後は、「グローバルとローカル、過去と未来を横断しながら想像する可能性」への気づきを起点に、領域横断的な協働を編み込んだ活動を展開したい。



ビエンナーレパブリックプログラム「Conjugations」でのFoundation Hメンバーによるトーク



Museu Afro Brasilコレクション展



Pivôにて開催されていたAdriano Costaの個展



須藤 菜々美 SUDO Nanami

アート・プロジェクトマネージャー

2020年早稲田大学文化構想学部卒業。大学在籍中からフリーランスで編集者として活動を開始し、各種メディアでの記事制作や運営、展覧会での情報設計や執筆を行う。その後、2022年～ NYAW inc.、Whatever Co.などの都内のスタジオに参加しながら、展覧会などのプロジェクトにおける制作統括、アーティスト・クリエイターのマネジメントを行う。

オリジナル・プログラム

アーティスト・イン・レジデンスを訪問

サンパウロ西部のヴィーラ・マダレナ地区にある3箇所のレジデンス (Ateliê Fidalga, FONTE, Canteiro) を訪問し、それぞれのオーナーと面会した。彼らは自らもアーティストでありながら、ギャラリーやレジデンス、コミュニティスペースとしての場所を企画運営している。訪問時にはスペインのレジデンスとの交換リサーチプロジェクトを共同で実施するなど、施設単位に閉じない横の連携が活発で、滞在アーティストが別のギャラリーで展示をすることもあるそうだ。アーティスト・リサーチの受け入れについては、オープンコールなどは現在設けられておらず、隣人のような「Informal」なコネクションを築いていく態度が印象的だった。



Ateliê Fidalgaでは毎日コミュニティランチがひらかれ、スタッフやレジデンス・スタジオを利用するアーティスト、来訪者らと一つの食卓を囲む。

印象に残ったプログラム

野外美術館「イニョチン」でのヒアリング

世界最大の野外美術館として知られるイニョチンでは、キュレーターのMarilia, PRのMarina, そしてエデュケーションのViniciusの3名にインタビューさせていただいた。

私の関心でもあった、自然とアートのコラボレーションにおける相互喚起や運用保持について、パビリオンができるまでのプロセスを通じて垣間見ることができた。自然の中に人工物としてのアートや建築を配置する上での植栽の持続可能性について提起したところ「植物園もビルドである」というMarianaの回答が最も印象的だった。作品は建造物の内装だけでなく、その周囲の植栽や地理的要因を含めてデザインされており、新たな総合芸術の持続可能性について試行錯誤をしていた。

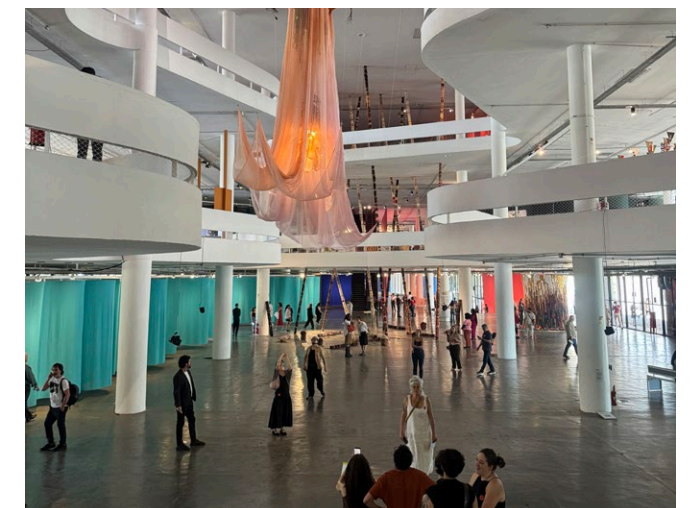


Inhotimにて、Dug AitkenによるSonic Pavilion。採掘場という場所の特性に焦点を当て、地下から収音したサウンドを聴くことができる。



派遣プログラムを終えて

遠く離れたブラジルでのネットワーキングはとても貴重な体験で、一度足を運ぶことで今後もより情報にアクセスしやすくなった実感がある。私のようなアートマネージャーは実装部分へのコミットが大きいため、社会・歴史の文脈を深められる視野が失われがちだと感じていた。その中で、サンパウロという街で多くの視察や面会ができたことで、ビエンナーレや美術館において共有するキーワードとして浮かび上がってきた「humanity」「ecology」「territory」「gender」について少しばかり触れることができた。今後も密度の高いインプットを続けると同時に、ギャラリーやレジデンスなどとの継続的なコミュニケーションと、小さなコラボレーションを具体化することから探っていきたい。



サンパウロ・ビエンナーレはアトランティカの歴史を踏まえたキュレーションと、オスカー・ニーマイヤーによる建築の吹き抜けを活用した会場構成が印象的。



檜山 真有 HIYAMA Maaru
キュレーター／アートセンターBUG

2023年よりリクルートアートセンター入社。越後妻有里山現代美術館MonET連続企画展ゲストキュレーター（2023-2026）。近年のキュレーションに田中藍衣個展「リバーストリング」（越後妻有里山現代美術館MonET、新潟、2024）、雨宮庸介個展「雨宮宮雨と以」（BUG、東京、2023）など。アートワーカー（企画者）向けプログラム「CRAWL」（BUG、2024-）を設計・運営するなど展覧会実践に限らないキュレーションの方法論を実践中。

オリジナル・プログラム

オスカー・ニーマイヤーが 設計した公園を訪問

イビラプエラ公園はサンパウロ・ビエンナーレの会場であり、ビエンナーレ視察とともに周辺のオーカと呼ばれる半球状のドームや博物館などを見学。ラテンアメリカ記念公園は1989年に完成した公園で、営業時間外ではあったものの建築のみの見学を許可いただき視察した。

サンパウロ市内の アートセンター／ギャラリー訪問

主な視察先はIMS Paulista、Travessa Dona Paulaにあるギャラリー群など。

IMS Paulistaは南米最大の写真コレクションを誇るインスティテューションで、先住民族の視覚アーカイブを行うColectivo Lakapoyの展覧会とブラジルを代表する写真家であるLuiz Bragaの展覧会を視察。

Atelie 397にてErica Burini氏がキュレーションした「Heroismo Botulismo」を鑑賞。Burini氏からガイドいただき、意見交換を行った。



ラテンアメリカ記念公園の触図

印象に残ったプログラム

拡張する国際展のスケールを体感

サンパウロ・ビエンナーレではInternational programを含め3日間の視察期間をいただいた。開幕初日では、キュレーターのボナベンチュール・ソー・ベジェン・ンディクンが参加アーティストを読み上げ、キュレーターシップを発揮するなど芸術祭における祝祭の醸成のあり方を身をもって体感した。一つの建造物でビエンナーレを完結させる単館型の芸術祭だが、会期前でのInvocations（召喚）、会期中のTributaries（支流）、Apparitions（出現）の開催など会場を超えた時空間においてもビエンナーレを拡張する姿勢が特徴的だと感じた。また、それらをこれまでの語彙ではなく、自らが選び抜いた語彙において遂行することに感銘を受けた。



サンパウロ・ビエンナーレ初日でのオープニングセレモニーでのボナベンチュール・ソー・ベジェン・ンディクンのパフォーマンス

派遣プログラムを終えて

自らの展覧会実践において「アーティストに作品をどのように空間に配置させるか」という問いを建築や都市のなかにヒントを見出してきた。そのため、大規模な都市計画を行ってきたオスカー・ニーマイヤーの仕事を実際に目の当たりにすることができ、今後の自らのキュレーションに活かすことができる大事な機会であった。

また、MASPでヒアリングした「テーマを設け、リサーチをイベントなどの形でひらきながら展覧会制作へと接続していく企画展の作り方」は、組織で働くキュレーターとして大いに役立つものだと感じた。



MASPでのヒアリング風景

ソウル・ パフォーミング・ アーツ・ フェスティバル



派遣先プログラム概況

【派遣先について】

ソウル・パフォーミング・アーツ・フェスティバル (SPAF)

2001年に開始された韓国最大規模の国際舞台芸術フェスティバルである。毎年秋にソウル・大学路で開催され、アーティストと観客の対話を重視しながら、国内外のコンテンポラリー作品を紹介している。「Entanglement and Friction (もつれと摩擦)」というテーマのもと、プログラムは、デジタル時代における芸術・科学・テクノロジーの新たな関係性、サウンドや新しい音楽によって拡張・変容するパフォーマンス言語、Dance Reflection by VC&Aとの協働を通じて再構築される現代ダンス、さらにアジア太平洋地域のアーティストによる同時代的課題への視座といった切り口を軸に展開された。演劇、ダンス、学際的アートを含む22作品の上演に加えて、ワークショップや共同制作ラボも実施された。



(c)2024 Seoul Performing Arts Festival.

パフォーミング・アーツ・マーケット・ソウル (PAMS)

2025年に20周年を迎えたアジア有数の舞台芸術プラットフォーム/芸術見本市。ショーケース、ピッチ、フォーラム、トーク、マッチング、ブース出展、ネットワーキングなど多彩なプログラムで構成されている。



【概要・趣旨】

同時期開催となるSPAFとPAMSのオープニングに合わせて現地に到着し、会期中に開催されたネットワーキングのためのレセプション、ピッチセッション、ブース出展など多様なプログラムを視察。様々なジャンルの舞台芸術関係者が一堂に会する場で国際的なネットワークを構築する。現地の舞台芸術プロデューサー、キュレーターと面会し、韓国における文化政策の現在地や、舞台芸術に携わる若手のキャリア形成、アジア連携や国際共同制作の状況・あり方の変遷などについて意見交換を行う。またSPAFでは、観劇を通じ、現代舞台芸術の新たな潮流を体感する。



SPAFの会場のひとつTINC (This is not a church)

【派遣対象】

舞台芸術(演劇、舞踏、音楽等全般)に関わる若手を中心とするプロデューサー、ディレクター、技術者等

【派遣期間(現地滞在)】

2025年10月15日～10月22日

【プログラム・アドバイザー】

小野江 麻里子 ONOE Mariko

舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)事務局長
2006～17年PARC - 国際舞台芸術交流センターにてTPAM in Yokohamaプログラム・オフィサーとして国際プラットフォーム事業に携わる。舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)の設立に参加し、2013年より事務局長として従事。2019年4月～2025年3月まで理事長兼事務局長。2009年文化庁新進芸術家海外研修制度研修員としてエディンバラ、ロンドンに滞在。認定NPO法人STスポット横浜、特定非営利活動法人国際舞台芸術交流センター、公益社団法人 全国公立文化施設協会、公益財団法人現代人形劇センター理事。文化庁文化芸術分野の適正な契約関係構築に向けた検討会議委員。



ベーシック・プログラム

※派遣参加者全員に必ず参加してもらう共通プログラム

ネットワーキング

【訪問先】PAMSオープンセレモニー&レセプション



SPEFフェスティバルディレクターの、チェ・ソッキュ氏と

視 察

【演目】ルーム・ウィズ・ア・ビュー

【カンパニー】(ラ)オールド × ローン with マルセイユ国立バレエ団

【会場】韓国国立劇場

【内容】文明崩壊後の世界を背景に、電子音楽とコンテンポラリーダンスによって、美しくも切実な抵抗の身振りを描き出す作品。



視 察

【演目】ハリボー・キムチ

【カンパニー】ジャハ・クー/CAMPO

【会場】SFAC Theater QUAD

【内容】身近な食文化を起点に、異なる視点や記憶、アイデンティティの層を浮かび上がらせる感覚的パフォーマンス。



半透明素材の屋台セットとスクリーン

視 察

【演目】ディアスポラ

【カンパニー】Chamber Made

【会場】世宗文化会館 S Theater

【内容】光と音を用いて、ユートピア的な未来像を構想するSFパフォーマンス作品。



ミーティング

【ヒアリング】Soohye JANG (舞台芸術プロデューサー、研究者、教育者)

【内容】韓国における文化政策の現在地やその中でプロデューサーとしてのキャリア形成、若手の舞台芸術制作者の労働・創作環境などを中心に意見交換を行った。



ミーティング

【ヒアリング】Kim Seong-Hee (インディペンデント・舞台芸術キュレーター)

【内容】韓国における舞台芸術のシーンの変遷や、アジア連携の役割、若い世代の動向、国際共同制のこれまでとこれからなどを中心にヒアリングを行った。



スケジュール

● ベーシック・プログラム ● オリジナル・プログラム

Day 1	AM	● ソウル着
	PM	● PAMSオープニングパフォーマンス&レセプション参加
		● Producer's Night <Independent Spirit>参加
Day 2	AM	● トークイベントPAMS Salon参加
		● PAMS Showcaseの作品鑑賞
	PM	● ヒアリングSoohye JANG (舞台芸術プロデューサー、研究者、教育者)
		● ヒアリングKim Seong-Hee (インディペンデント・舞台芸術キュレーター)
Day3	AM	● PAMS Pitching Session 参加
	PM	● PAMS Showcaseの作品鑑賞
		● PAMS Night(ネットワーキング)参加
Day4	AM	● PAMS Pitching Session 参加
		● MODU ART THEATRE視察
	PM	● PAMS Showcaseの作品鑑賞
		● SPAF『ルーム・ウィズ・ア・ビュー』(ラ)オールド × ローン with マルセイユ国立バレエ団鑑賞
Day5	AM	● トーク参加[PAMS x KAMS ACADEMY]
	PM	● ハリボー・キムチby ジャハ・クー/CAMPO鑑賞
Day6	AM	● ARARIO MUSEUM視察
	PM	● SPAFディアスポラby Chamber Made鑑賞
		● SPAF 12 Soundsを観劇
Day7	AM	● 稽古場視察
	PM	● SPAFワークショップ参加
		● Kミュージカル観劇
Day8		● 帰国

※オリジナル・プログラムは各自異なるため、一例として掲載をしています。



©comuramai

河野 遥 KAWANO Haruka

舞台制作

国立音楽大学音楽文化教育学科音楽情報専修卒業。在学時より演劇カンパニーヌトミックに加入し、劇団運営と公演制作を務める。またフリーランスの制作者として、小・中劇場規模の公演や演劇祭の制作、団体運営などを担う。

オリジナル・プログラム

文化施設の見学

ソウル文化財団が運営する「ソウル演劇創作センター」を訪問。創作から上演までを支援する拠点として、2つの劇場に加え、演劇書を備えたラウンジや、衣装・小道具の共用プラットフォームを運営し、実験的な創作を支援する多様な公募事業が行われている。

また「Modu Art Theater」を訪問。最先端のバリアフリー設備に加え、障がいのあるアーティストとの創作や、アクセシビリティマネージャーの配置など、創作と運営の両面からアクセシビリティを捉える姿勢が印象的であった。

SPAFワークショッププログラムへの参加

「サウンド・アンド・テクノロジー・ラボ」のフォーラムに参加。SPAFで作品を発表した音や音楽を主要な表現媒体とするアーティストらが、プレゼンテーションとディスカッションを行った。

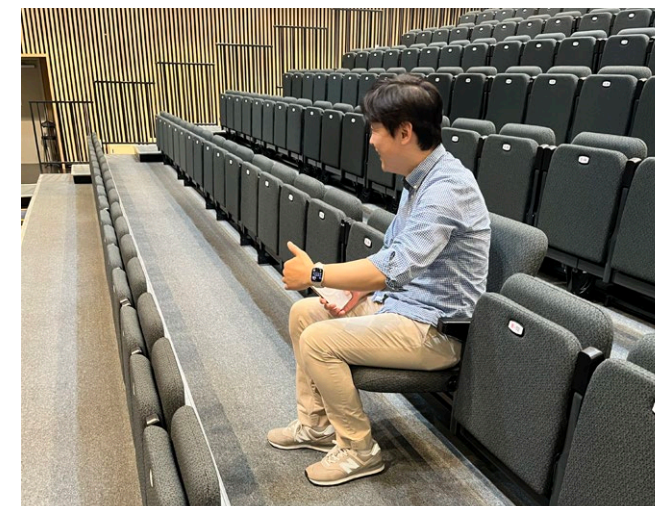


ソウル演劇創作センターのラウンジ

印象に残ったプログラム

音/音楽のドラマトゥルギーをめぐるフォーラム

自身の音楽のバックグラウンドを踏まえ、SPAF フェスティバル・ディレクターのチェ・ソッキュ氏に参加を勧めていただき、「サウンド・アンド・テクノロジー・ラボ」のフォーラムを訪れた。“サウンドドラマトゥルギー”という概念を手がかりに、作品における音/音楽のドラマトゥルギーを多角的に捉え、新たな表現の可能性について議論が行われた。本テーマは、大学在学時より関心を寄せてきた領域であり、現在所属する団体の創作の核とも重なるものである。国際的な文脈の中でこのテーマに出会い、共有できたことは、今後の創作や国際的な活動を考えるうえで重要な手応えとなった。



オ・セヒョン氏にModu Art theaterの館内を案内してもらう。着席状態でも人が通れる客席に感動

派遣プログラムを終えて

将来的にプロデューサーを志向する立場として、国際的な創作環境を知る第一歩にソウルを視察した。目的に特化した施設の訪問を通じ、文化予算の差異を実感した一方で、事業設計や組織運営から、金銭に依らない創作支援の在り方を想像する手掛かりを得た。また、滞在中は「プロデューサーとは何か」を終始問い続けることとなった。国を超えた業界関係者と体験を共にし、交流を通じて日本を相対化して捉える視点を得られたことは大きい。今後は個人としても団体としても、アジア発の舞台芸術作品を創出していく一員として、活動の幅を広げていきたいと強く思うきっかけとなった滞在だった。



フォーラムの様子



撮影：雨宮透貴

木村 友哉 KIMURA Yuya

舞制作者／ライター／スペース運営者

演劇コレクティブ「ザジ・ズー」共同主宰、「仮設社」代表。横浜・中村町の多角的スペース「ザ・シティイ」を拠点に、演劇創作と場づくり、編集を横断しながら、都市と舞台芸術の〈往還〉の回路を構築している。

オリジナル・プログラム

様々なオルタナティブスペースを視察

オルタナティブスペース（TINC、KOTE、第3の家）を巡り、イベントの受け皿としてのスペース、複合空間の稼働状況、家型アーティストランススペースの持続可能性をヒアリング。「場所に経験が溜まっていく」感覚が共通していた。

韓国の若手実践者・プロデューサーとのミーティング

韓国の若手実践者・プロデューサーと現代韓国／日本演劇シーンの差異、国際共同制作の可能性、制作上の前提・文脈について率直に議論した。

韓国芸術総合学校(K-ARTS)の視察

韓国芸術総合学校(K-ARTS)を視察し、芸術教育のスケールと思想を体感した。まず建物の規模が圧倒的で、舞台芸術に限らず複数領域が超巨大な同じキャンパスに共存している点が印象的だった。



Producers' Night <Independent Spirit>@Insa-dong KOTE

印象に残ったプログラム

「なぜ」から「どう」へ—PAMS × SPAF

特に印象に残ったのは、PAMSとSPAFという国際的な場に身を置きつつ、キム・ナムヒョンら若手プロデューサー／実践者と対話できた時間である。フェスティバルと芸術見本市を往復することで、日本／韓国／世界の距離が相対化され、国際共同制作を「なぜ」ではなく「どうするのか」を具体的に考えられた。ベーシック・プログラムでも多様な人々と話す中で、自分が日本で同じ密度の問いを受け取れているかを省みた。相手を他者として扱い、安易に共通項へ回収しない姿勢が、次の展開へと踏み出す推進力になっていくと気づいた。

派遣プログラムを終えて

韓国の街を駆け巡り、拙い英語で話しかけ、携帯の充電が切れるほど都市を往復した。行かなければ「なぜ」で立ち止まったままだが、見る・話す・移動することで輪郭が立ち上がり、派遣で得た学びが手触りとして残った。なかでも「人が集まれる場」の条件を身体で理解できたことが大きい。今後は、その学びを蓄積し共有できる場を開き、関係が育つ回路をつくっていく。現場で交わした会話が次の企画の種になっている。友人や知り合いも増え、韓国の助成金情報も紹介してもらった。いつか往復ツアーを実現したい。派遣後のYPAMでも再会が生まれ、次の協働の手触りを感じた。楽しい未来を育みたい。貴重な機会をありがとうございます。



K-ARTS(韓国芸術総合学校)訪問の様子



SPAFの会場のひとつでもあるTINCの様子



松尾 加奈 MATSUO Kana
プロデューサー

NPO法人月面脱兎社代表理事。東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ World Theatresコース修了。舞台芸術の創作プロセスに関心を持ち、これまでダムタイプ、松田正隆、ヌトミックなどの舞台公演のほか、演劇ワークショップの記録・アーカイヴ化に取り組む。プロデュース作品としては、音楽劇『How Was It For You?』、劇映画『Neighbor's』、ドキュメンタリー映画『人々の大地』等。

オリジナル・プログラム

[Creative I am here]による『老人と海』の観劇

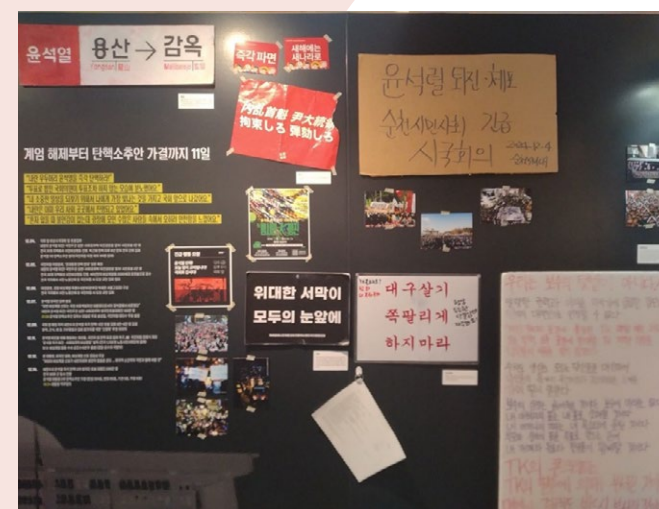
大型フェスの周縁で、自力で活動する同世代のカンパニーと出会った。参加者はイヤホンから流れる音楽とセリフに耳をすませ、ヘミングウェイのフィクション世界を恵化洞の街並みと重ねた。

植民地歴史博物館の視察

民族問題研究所が中心となり市民の手で誕生した博物館。1階は特別展「民主主義と旗」が開催され、2024年12月の非常戒厳がもたらした市民の怒りと混乱がアーカイヴされていた。

Dong Theatre Company 稽古場の見学

新作『ムクティ』の稽古を見学した。『ムクティ』は6人の移民が神々とともに国境を越え、韓国の田舎町にやってくる物語。シンプルな舞台セットで、観客の想像力を信頼した作品だった。



オリジナルプログラム:植民地歴史博物館の視察。博物館1階の特別展「民主主義と旗」の様子。実際のデモで靡いていた手作りの旗や、横断幕、アイドル応援のペンライト、デモの様子やSNSの動向を伝える映像が所狭しと並べられていた。(2025年10月18日(土)、筆者撮影)

印象に残ったプログラム

稽古場から見えてきた社会課題

ウ・ヨン氏のサポートのもと、東大門区旺山路のDong Theatre Companyの稽古場に足を運ぶことができた。ウ・ヨン氏は、KAMS国際交流部長を務め、PAMSをはじめとするプログラムや多くの国際交流事業を立ち上げてきたキーパーソンである。今回は、Dong Theatre Companyの新作公演のドラマトゥルクとして現場を支えていた。Dong Theatre Companyは、現在アルコ芸術劇場のディレクターとして活躍する、カン・リャンウォン氏が率いる劇団である。稽古場では、2025年11月に大学路アートシアター小劇場にて上演予定の『ムクティ』の通し稽古が行われていた。韓国における移民の問題に鋭く切り込んだ作品であり、日本の社会状況との重なりが見られたために印象に残る経験となった。



オリジナルプログラム:「恵化洞1番地同人フェスティバル」における移動型演劇『老人と海』の観劇後、[Creative I am here]のメンバーと共に撮影。参加者はイヤホンを着用し、ライトのついた電動車椅子を追いかけるとして恵化洞の街を歩いた(2025年10月16日(木)20時公演)

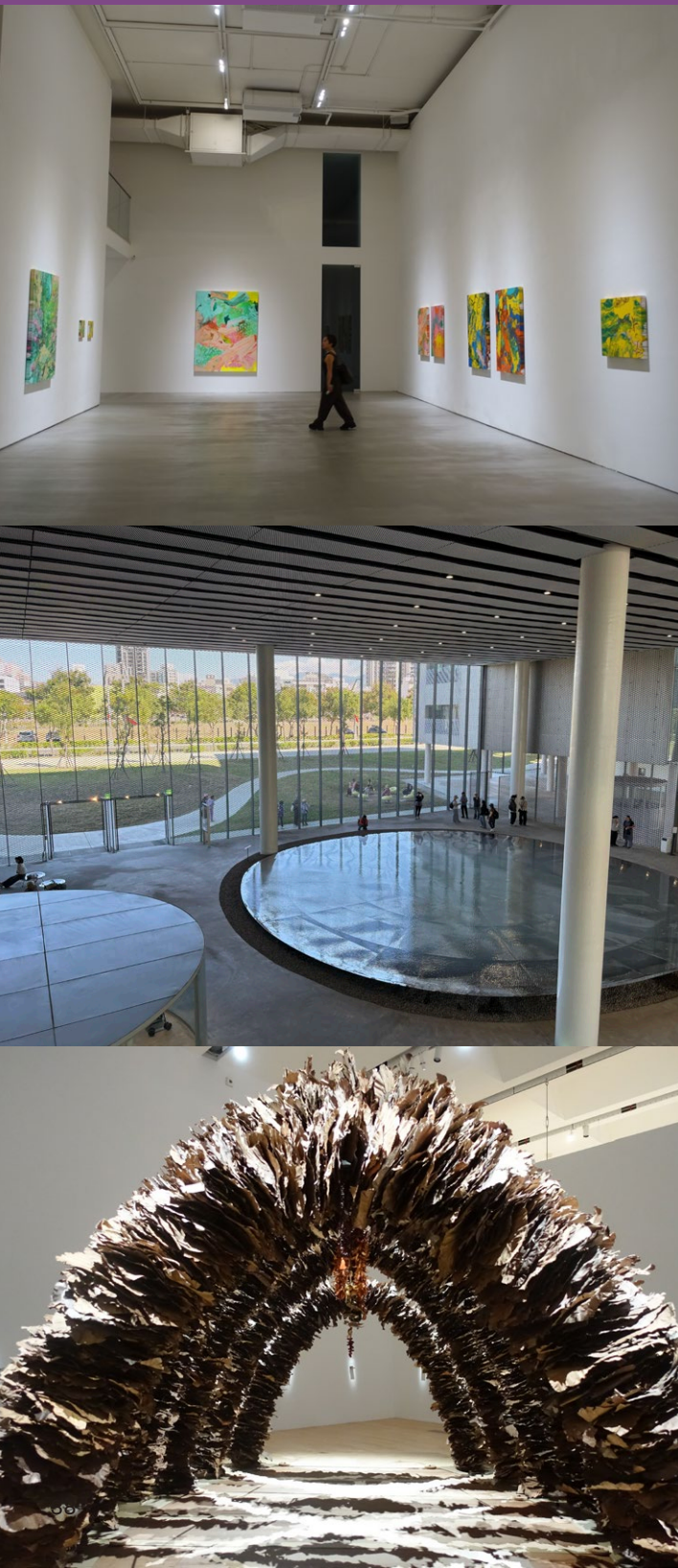
派遣プログラムを終えて

4年前にNPOを立ち上げたが、組織としてはまだ海外との連携に乏しく、ソウル滞在を通じて民間レベルでの人的ネットワークを形成したいと思い、参加した。私にとって韓国の演劇との最初の出会いは、南山芸術センターの協力によって2016年にフェスティバル/トーキョーで上演された『哀れ、兵士』(作・演出パク・グニョン)だった。当時南山芸術センター劇場長だったウ・ヨン氏とつながることで、Dong Theatre Company の新作『ムクティ』に出会うことができた。『ムクティ』で描かれる人間模様を通じて、韓国と共通する社会課題に気づき、排他主義や分断の言葉が蔓延するなかで、共に未来を考えていける関係を築きたいと思い、東京公演の実現を目指している。



Dong Theatre Company の新作『ムクティ』の稽古場にて。写真右から、ウ・ヨンさん(ドラマトゥルク)、松尾、キム・ジナさん(演出助手)、カン・リャンウォンさん(演出)。(2025年10月20日(月)19:00-23:00)

台北 ビエンナーレ



派遣先プログラム概況

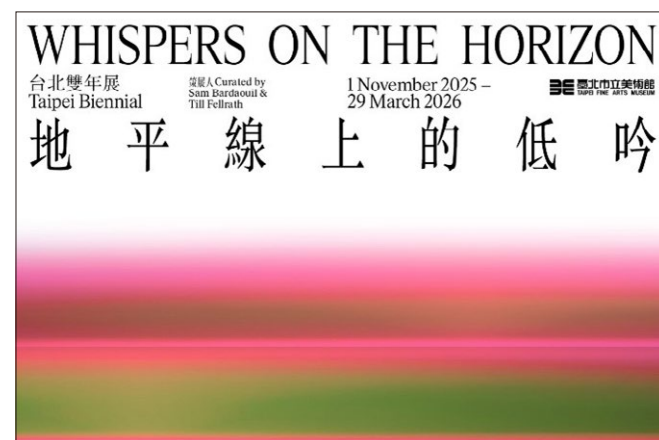
【派遣先について】

台北ビエンナーレ

1998年に台北市立美術館の指揮のもと、アジア太平洋地域に重点を置いた展覧会として始まり、現在ではアジアにおける重要な国際ビエンナーレの1つとなっている。

第14回台北ビエンナーレ2025「地平線のささやき」は、ベルリンのハンプルガー・バーンホフ国立現代美術館の館長を2022年より共同で務めるサム・バーダウィルとティル・フェルラスがキュレーションを担当し、世界37都市から72名のアーティストによる、美術館のユニークな建築と文脈に深く関わる33点の新規委嘱作品を含む約150点の作品が紹介された。

「Whispers on the Horizon(地平線上のささやき)」をテーマに掲げる本展は、植民地支配、アイデンティティの変遷、政治的変革に彩られた台湾の重層的な歴史を背景に、人々を前進させるエネルギーともなる「憧憬」という概念を探索する。



【概要・趣旨】

台北ビエンナーレのオープニングデーに合わせて派遣し、ガイドツアーやレセプションパーティーへの参加を通して、開幕時に集う参加アーティストやキュレーター、各国のアート関係者とのネットワークづくりを行う。台中では、台湾発の美術館と図書館の複合施設である「台中緑美図」のプレオープンを訪見し、館長とのミーティングを行う。その他、複数都市の美術館や文化施設の視察、関係者とのミーティングを通して、台湾における文化芸術シーンや文化政策の実状について理解を深める。



TKG +gallery(台北)でのオープニングレセプションに参加



高雄市立美術館

【派遣対象】

視覚芸術に関わる若手を中心とするキュレーター、ディレクター、アートプロフェッショナル等

【派遣期間(現地滞在)】

2025年10月30日～11月6日

【アドバイザー】

片岡 真実 KATAOKA Mami

森美術館 館長

2003年より森美術館、2020年より現職。2023年4月より国立アトリサーチセンター長、2025年4月より京都芸術大学ICA京都所長を兼務。

ヘイワード・ギャラリー(ロンドン)インターナショナル・キュレーター(2007～2009年)、第9回光州ビエンナーレ共同芸術監督(2012年)、第21回シドニー・ビエンナーレ芸術監督(2018年)、国際芸術祭「あいち2022」芸術監督(2022年)。CIMAM(国際美術館会議)では2014～2022年に理事(2020～2022年に会長)を歴任。



撮影：新津保建秀

ベーシック・プログラム

※派遣参加者全員に必ず参加してもらう共通プログラム

台北

視 察

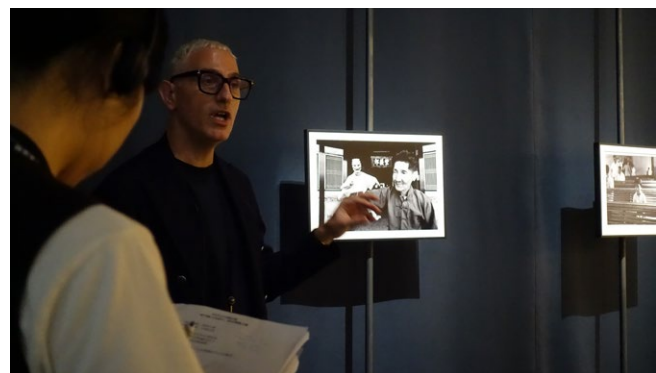
台北ビエンナーレ

【訪問先】台北市立美術館

Sam Bardaouil(台北ビエンナーレ キュレーター／国立ハンブルガー・バーンホフ現代美術館)によるガイドツアーに参加。作品の背景や、ビエンナーレのテーマとのつながりについて話を聞きながら展示を廻った。



台北ビエンナーレ 会場となった台北市立美術館



キュレーターによるガイドツアー

視 察

【訪問先】新北市美術館

【施設概要】2025年4月、台北市を取り囲む新北市に開館。展示面積4000平方メートル、建物周囲の庭園にはパブリックアートが常設されている。

【ヒアリング】Hsieh Feng-Rong(シニアキュレーター)、Anita Huang(展覧会企画部主任)

新北市と台北市と関係性、新北市の歴史や土地性についての話をしてもらい、美術館の方針や運営面の概要、開催中の企画展の展示内容についてヒアリングした。



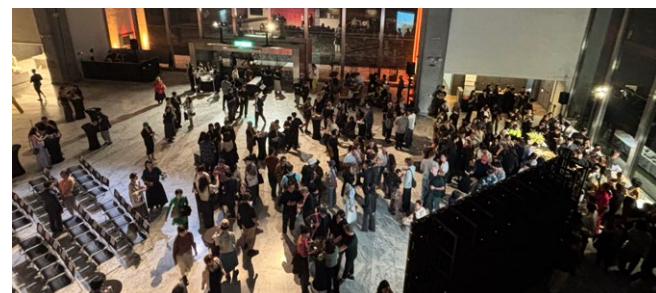
新北市美術館外観



Hsieh Feng-Rong氏、Anita Huang氏とのミーティング

ネットワーキング

台北ビエンナーレ オープニングレセプション



ミーティング

【ヒアリング】Jo Hsiao(台北市立美術館 展覧会部門アソシエイトリサーチャー)

台北市と美術館との関係性や、資金面の運営について意見交換を行い、ビエンナーレのテーマについて説明を受けた。



台中

視 察

【訪問先】台中緑美図

【施設概要】旧軍用空港跡地に建つ、台中市立美術館と台中市立図書館を一体化した台湾初の複合型文化視察。SANAAが建築を手がけたことでも知られる。2025年12月13日開館(訪問時はプレビュー期間)。

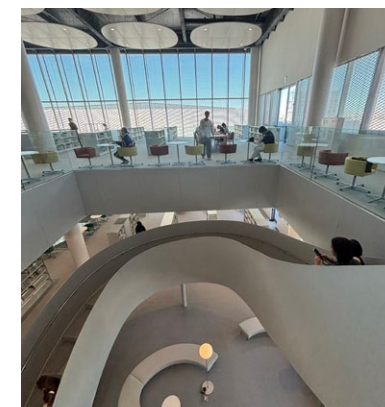
【ヒアリング】Nicole Lai(館長)、Megan Lan(パブリックリレーションズ担当)

美術館創立の背景や館の方針、館が行っているレジデンスプログラムについてヒアリングした。

ミーティングの後は教育部門担当のDaisy氏に施設内をツアーしてもらった。



台中緑美図 エントランスロビーにて



ガラス張りの壁から入る陽光と曲線が美しい館内

スケジュール

● ベーシック・プログラム ● オリジナル・プログラム

- Day 1 AM ● 台北着
PM ● 台北ビエンナーレ ガイドツアー
- Day 2 AM ● 新北市美術館視察、ミーティング
PM ● 台北ビエンナーレ オープニングレセプション
- Day3 AM ● 台北ビエンナーレ ミーティング
PM ● 白晝之夜(ニュー・ブランシュ)
- Day4 AM ● 台北ビエンナーレ視察
PM ● 台北ビエンナーレ フォーラム参加
● Taiwan Film and Audiovisual Institute
- Day5 AM ● 台北～高雄 移動
PM ● 高雄市立美術館訪問
● 駁二アート特区訪問
- Day6 AM ● 台南市美術館訪問
● 国立台湾史前文化博物館訪問
PM ● 国立台湾文学館訪問
● Pan Pacific Triennale ワークショップ参加
- Day7 AM ● 高雄～台中 移動
● 台中緑美図視察、ミーティング
PM ● 中山73影視芸文空間訪問
● 台中国家歌劇院訪問
- Day8 ● 高雄発
● 帰国

※オリジナル・プログラムは各自異なるため、一例として掲載をしています。



井戸沼 紀美 IDONUMA Kimi

キュレーター、ライター、編集者

映画上映と執筆を軸にした個人プロジェクト「肌蹴る光線(はだけるこうせん)」を2018年に始動。各種メディアへの寄稿や不定期の上映活動が続ける。2025年より脱植民地主義の視点からアジアの映画コミュニティにおける新しい関係性の構築を模索するコレクティブ「///(スリースラッシュ)」に参加。

オリジナル・プログラム

アートハウスシネマ訪問と オルタナティブな映画運動の調査

台北ビエンナーレの参照作品として挙げられた侯孝賢監督の映画のような「芸術映画」がどのような場所で上映されているのかを調査した。まずは各地のアートハウスシネマ / 映画アーカイブを訪問(台北之家 / Taiwan Film and Audiovisual Institute / 高雄フィルムアーカイブ / 中山73影視芸文空間)。加えて劇場外で行われる上映活動についても調査した。台北では上映団体「AeaRflex」の創立メンバーTzu-An Wu氏と面会し、高雄では地元作家の映画を中心に作品を紹介する「民強国際影展」を訪問。また、アートセンター「C-LAB」主催のフェスティバルと台北のアートナイト「臺北白晝之夜」(ニュイ・ブランシュ)では野外上映にも参加した。



Taiwan Film and Audiovisual Institute内のシアター



C-LABのサウンドアートフェスティバルで実施された屋外上映の様子

印象に残ったプログラム

翻訳家・歴史家 / 頼英泰さん面会

東京大学での交換留学を経て、修士・博士過程で台湾の近代史を学び、現在は翻訳家と兼業してアートや映画等における歴史考証や歴史コンサルティングを担当する頼(らい)さん。史実として資料から受け取る情報の域を超えて、生々しいアイデンティティの問題として日本統治時代の台湾に関する見解を伺えたことは貴重な体験だった。また、そうした歴史の中で侯孝賢の映画の果たした役割の大きさ(台湾の歴史におけるタブーを真正面から取り上げ反響を得るなど)を知り、単に商業的な成功を目的とするのではない映画が作られ、上映され続けていくことの意義を再認識した。



「臺北白晝之夜」にて傘を差しながら映画を観る人々

派遣プログラムを終えて

初日の夕食では、現地に20年以上暮らすライターの岩切澪さんが「台湾はどんどん良くなっている」と仰っていたが、台北・台中・高雄の各エリアで多数の施設を訪問し、また様々な文化人と交流したことで、その前向きなエネルギーを肌で感じられたことは得難い経験であった。今後も各人から共有いただいた知識や思いを無駄にすることなく学び続け、各団体／個人との交流を続けることで、日本の映画文化がアジア各国や視覚芸術分野と連携していくための方法を探りたい。



頼英泰さん

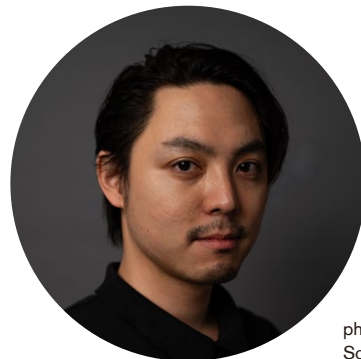


photo
Sou Matsuzawa

黒沢 聖覇 KUROSAWA Seiha

キュレーター、プロジェクトマネージャー

複数の国内美術館を経て、現在PAN沖縄準備室キュレーター／プロジェクト・マネージャー。主な展覧会に、「コレクション展1 それは知っている:形が精神になるとき」(2023、金沢21世紀美術館)、「ZERO IS INFINITY『ゼロ』と草間彌生」(2020、草間彌生美術館)、タイランド・ビエンナーレ・コラート2021(コ・キュレーター、2021、ナコンラチャシマ県各地)など。

オリジナル・プログラム

Jaha Koo『Haribo Kimchi』鑑賞

国家两厅院実験劇場にてJaha Kooのパフォーマンスを鑑賞した。食を媒介に歴史と記憶を立ち上げる没入の手法から、身体性を伴う表現の可能性を学んだ。

竹内公太、Zian Chenとのミーティング

台北にて竹内公太及びZian Chenと会食し、台湾原住民史と日本統治をめぐる記憶の問題について意見交換を行い、植民地主義を再考する視座を得た。

台東における台湾原住民アートシーン調査

台東にてMilay Mavaliwのスタジオ訪問と博物館視察、関連ワークショップに参加し、原住民文化と現代美術の接続に関する知見を深めた。



Pan Pacific Triennaleのワークショップにて。一番左が筆者

印象に残ったプログラム

原住民文化の歴史と現代美術の実践

特に印象に残ったのは、台東における台湾原住民作家らのアートシーンの調査である。アーティストのMilay Mavaliwのスタジオ訪問、国立台湾史前文化博物館の視察、Pan Pacific Triennale関連ワークショップへの参加等を通じ、原住民文化の歴史と現代美術実践が密接に結びつく現場を体感した。台北の国際化されたアートシーンとは異なり、台東では異なった地域性に基づく実践が現在進行形で展開されており、アジア太平洋圏の新たな文化的ハブとして今後の発展が期待される。



台湾プユマ族のアーティストMilay Mavaliwのスタジオにて。左から報告者、作家、作家アシスタントの順

派遣プログラムを終えて

私は現在、沖縄に開設予定のアジア現代美術のアートセンター「PAN沖縄」の準備に携わっており、同施設におけるアジア美術紹介の基盤となる視点の構築を目的として本派遣に参加した。沖縄と歴史的・地政学的に関係の深い台湾を横断的に調査し、台湾の現代美術の現在地を把握することを目的としていた。実際に台北を中心とする国際展や各地の美術館の建設ラッシュも含めた新しい制度設計への試みなど、台湾のアートシーンが単線的ではなく、多層的な歴史認識と文化政策によって支えられていることに新鮮な印象を受けた。これらの知見を今後、沖縄・アジア地域内の複数の視点からアジア美術を捉え直す企画に活かしていきたい。



TKG+ギャラリーのオープニングにて。左からキュレーターのZian Chen、台北市美術館のキュレーターFeng Hsin、報告者の順



和多利 光 WATARI Hikaru

キュレーター、インストーラー、イベント企画立案
ワタリウム美術館勤務。「パビリオン・トウキョウ2021」「Reborn-Art Festival 2021-22(後期)」の作品インストール、運営。新藤淳氏(国立西洋美術館主任研究員)、山口桂氏(クリスティーズジャパン 代表取締役社長)らを講師に招き、現代アートとの関わり方を模索するシリーズ講演、「知る・見る・創るアート」を企画。

オリジナル・プログラム

宝蔵巖国際芸術村を訪問

元々は違法建築の集落であった場所を、アーティスト・イン・レジデンス施設に変えた村。3~6ヶ月の単位で年に数人のアーティストを世界中から受け入れ、展示を行うプログラム。

高雄市立美術館を訪問

朝一番で美術館に着いたが、すでに美術館の周辺は子供から大人まで、多くの人で賑わっており、幅広く活用されていた。展示空間では中学生の団体の姿。学年ごとに展示鑑賞を行い、高雄市立美術館に隣接されているアトリソースセンターにてワークショップを行っている引率の先生から教えてもらった。作品鑑賞・解説だけでなく、工作も合わせることで作り手の視点も感じられる良いプロジェクトだった。



宝蔵巖国際芸術村

印象に残ったプログラム

台中市立美術館訪問で見た 新たな美術館のあり方

館長のNicole Lai氏とMTG。その後、館内の案内。階層ごとに空間が分断されるのではなく、各々が連続してつながっており、建物全体を通しての一体感がある。地下には作品倉庫の他にも、作品の素材、照明の当て方による作品の見え方など、美術館の裏側を学ぶことができるエリア。アート作品に直接活用されるものだけでなく、石膏や研磨機械、ビスなどインストールに用いられる道具や素材についても詳しく知ることができ、より深くアートに触れられる。これまでの美術館とはコンセプトから異なる、新しい切り口で街との共存を図っている点がとても良かった。美術館のあり方を考えさせられる良い機会になった。



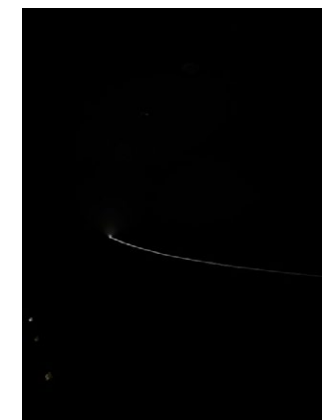
台北ビエンナーレキュレーター、サム・バルダウイル(左)とティル・フェラス(右)に面会

派遣プログラムを終えて

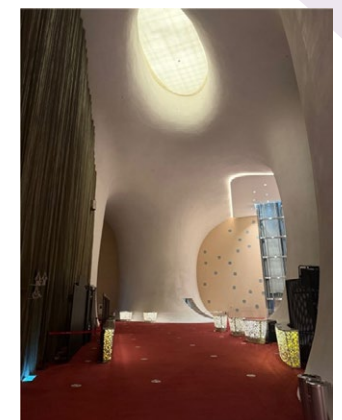
東アジアアート圏の人脈形成。台湾の文化情勢を知る。台湾のランドスケープ、まち規模でのアートの活用法を学ぶ。以上3つを大きな目的に派遣プログラムに参加した。

ベーシックプログラムでは、アーティストやキュレーターなど多くのアート関係者を紹介していただいた。オリジナルプログラムでは展示を観て、アポを取った方と面会するだけでなく、まちを歩き、各地域の現地の方と交流することを意識した。

どのまちも多くのアート作品があり、人々が当たり前前にアートと共存していた。アートをカルチャーとして日常と区別せず、生活の一部に溶け込んでいることの素晴らしさを知り、東京もそんなまちでありたいと考えさせられる派遣となった。



金馬賓館 ALIEN Art Centre、



台中国家歌劇院
伍韶勁「Crossing」



松山文創園區

ベルリン 国際映画祭



派遣先プログラム概況

【派遣先について】

ベルリン国際映画祭

世界最大級の一般公開映画祭の一つとして、毎年世界中から数万人の観客が訪れる。映画業界とメディアにとって、2月の11日間は年間カレンダーにおける最重要イベントの一つであり、不可欠な取引の場でもある。

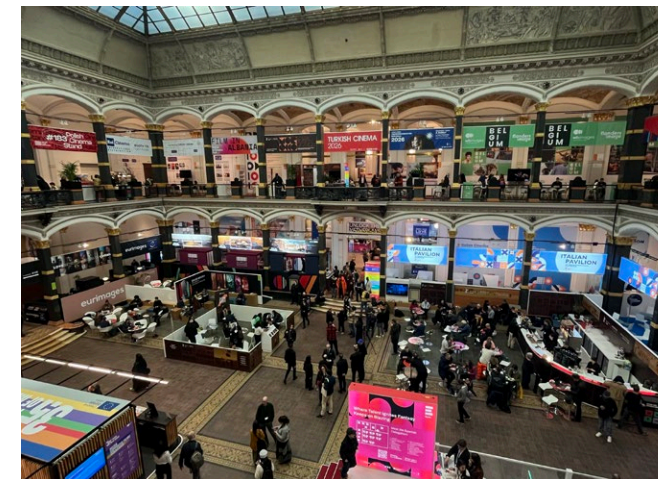
冷戦初期の1951年、ベルリン市民のために「自由世界のショーケース」として創設された映画祭であり、激動の戦後と分断都市という特異な状況に形作られ、ベルリン国際映画祭は異文化交流の場、社会問題を映画的に批判的に探求するプラットフォームへと発展した経緯をもち、他の主要映画祭の中で最も政治的な性格を持つと評されている。

ヨーロッパ・フィルム・マーケット(EFM)

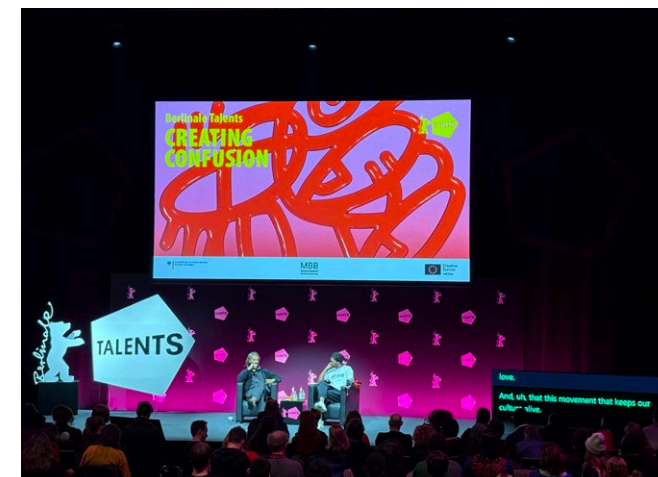
ベルリン国際映画祭と毎年同時開催される、世界の映画・メディア・エンターテインメント産業を代表する主要プラットフォームの一つであり、活気あるマーケットプレイスとして、プロデューサー、配給会社、販売代理店、バイヤー、資金提供者など主要な専門家を集め、映画やシリーズ作品、ドキュメンタリー、その他の映像コンテンツの売買やライセンス供与などが行われる。取引の場としての側面を超え、EFMは協業、トレンド探求、ネットワーキングの重要な拠点として機能し、業界の未来を形作る場となっている。

【概要・趣旨】

世界三大映画祭(カンヌ、ヴェネツィア)の一つであるベルリン国際映画祭及び同時開催されるマーケットプレイス、ヨーロッパ・フィルム・マーケット(EFM)への視察を中心に行う。映画祭では公式上映されるノミネート作品やバイヤー向けの出品作品の鑑賞、EFMではピッチ・セッションやトークプログラムの視察、関係者へのヒアリングなどを行い、商業ブースでは業界関係者とのミーティングを行う。また、ベルリナーレ・タレンツのオープニングセレモニーや各国のレセプションにも多数参加し、今後の海外協働に向けたネットワークの構築を目的とする。



EFMの会場となったグロピウス・バウ



ベルリナーレ・タレンツでのトークプログラム

【派遣対象】

若手を中心とする映画業界関係者(映画祭ディレクター、プロデューサー、映画監督、脚本家、技術・制作スタッフ、映画メディア・評論家等)

【派遣期間(現地滞在)】

2026年2月11日～2月18日

【映画祭派遣アドバイザー】

是枝裕和 KOREEDA Hirokazu

映画監督

1962年、東京生まれ。早稲田大学第一文学部文芸学科卒業後、テレビマンユニオンに参加。1995年、「幻の光」で映画監督デビュー。

2018年、「万引き家族」が第71回カンヌ国際映画祭でパルムドールを受賞、第91回アカデミー賞外国語映画賞にノミネートされた。

「怪物」(2023年)は、第76回カンヌ国際映画祭にて脚本賞、クィア・パルム賞を受賞。

2026年には、綾瀬はるか、千鳥・大悟を主演に迎えた映画「箱の中の羊」、藤本タツキ原作の人気作を実写化した「ルックバック」の2作を公開予定。



©瀧本幹也

ベーシック・プログラム

※派遣参加者全員に必ず参加してもらう共通プログラム

視 察

ベルリン国際映画祭

【概要】映画祭ではFestival Accreditationというパスを取得し、映画祭で公式に招聘される作品(Festival Progamme)や、プレス向けバイヤー向けの出品作品を鑑賞した。鑑賞作品は、映画祭の中心的セクションである「コンペティション部門」をはじめ、従来の物語映画とは異なる、表現重視、挑戦的な映画やドキュメンタリーなどが揃う「フォーラム部門」、2025年から新設された、長編初作品(デビュー作)に限定した競争セクション「パースペクティブ部門」など8部門から各派遣参加者の関心が高いものをそれぞれが自由に選択して鑑賞した。

【会場】コンペティション作品の世界初上映、オープニング／クロージング、ガラ上映の中心会場として使用されたBerlinalle Palastやベルリンを代表する歴史ある映画館であるZoo Palast、大規模シネコンのCinemaxXやCubix Kinoなど、およそ15か所が上映会場として使用された。



Berlinalle Palast会場内の雰囲気



ユニークな会場の一つSilent Green Kulturquartier

視 察

ヨーロッパ・フィルム・マーケット(EFM)

【概要】EFMの入場、参加にはMarket Badgeというパスの取得が必要となる。パスでアクセスが可能となるのは、各国の商談ブースが並ぶマーケットプレイスの他、EFMで開催されるトークプログラムやインダストリープログラムに加え、プレス向け、バイヤー向けのスクリーニング上映の観覧など。派遣参加者は各自で現在進行しているプロジェクトまたは今後のプロジェクトのために有意義となりうるミーティングをセッティングし、トークプログラムやインダストリープログラムにも積極的に参加。空き時間を見つけてスクリーニング上映の鑑賞を行った。



【会場】EFMの会場はMartin-Gropius BauとMarriott Hotelの2か所が主となる。Martin-Gropius-Bauは本来、国際的な大型美術展などを開催する、ベルリン屈指の企画展専門美術館。Marriott Hotelでは2, 3, 9, 10階の各フロアの客室がそのまま各プロダクションのブースとなっており、かなりクローズドな商談スペースとなっていた。また、大型ワゴンのような移動式シネマEFM CinemobileやMirror Tentなど、仮設式のサテライト会場がいくつか用意されており、全て徒歩圏または短距離移動でのアクセスが可能な位置にある。

ネットワーキング

ベルリナーレ・タレント オープニングセレモニー

【概要】ベルリン国際映画祭と同時開催される、若手・中堅映画人向けの国際育成プログラム。世界100か国以上から応募があり、選抜された200名程度が参加者と関係者のみのオープニングに参加。



ネットワーキング

JAPAN NIGHT2026

【概要】ベルリナーレ招待作品の監督や日本の若手映画人材、関係者が集まり交流を行った。



スケジュール

● ベーシック・プログラム ● オリジナル・プログラム

- Day 1 PM ● ベルリン着
- Day 2 ● ベルリン国際映画祭/EFM視察
● [ミーティング]セールスエージェント複数件
● [映画] 鑑賞
- Day3 ● ベルリン国際映画祭/EFM視察
● [映画]Everybody Digs Bill Evans鑑賞
● [ミーティング]セールスエージェント複数件
● [ネットワーキング]Berlinale Talents Opening Ceremony参加
- Day4 ● ベルリン国際映画祭/EFM視察
● Alte Nationalgalerie等、ベルリン美術館島視察
● [ネットワーキング] _HONG KONG NIGHT参加
- Day5 ● ベルリン国際映画祭/EFM視察
● [TALK]AFAN: The Pulsating Energy of the Asian film markets視察
● [ミーティング]セールスエージェント複数件
● [映画] しびれ鑑賞
- Day6 ● ベルリン国際映画祭/EFM視察
● Pitch Selection by Emerging Producers from VIPO視察
● [映画] Filipinana視察
● ベルリンの壁East Side Gallery視察
● [ネットワーキング]大使館主催JAPAN NIGHT参加
- Day7 ● ベルリン国際映画祭/EFM視察
● [TALK]World Cinema Fund Talk: Alain Gomis Berlinale Talents視察
● [映画] Nina Roza鑑賞
● [ネットワーキング] セールスエージェントレセプション参加
- Day8 ● ベルリン発
- Day9 ● 帰国

※オリジナル・プログラムは各自異なるため、一例として掲載をしています。



中馬 康輔 CHUMA Kosuke
プロデューサー

2020年よりTWENTY FIRST CITYにて、海外の映画、ドラマ、CMの国内制作に携わる。担当作品に『Sunny』（2024年／A24）や『Bullet Train』（2022年／Sony Pictures）など。2024年には映画『グレース』の買付、配給を行う。現在は、台湾との共同製作による初の長編映画プロデュース作品『ポラリスが降り注ぐ夜』を準備中。

オリジナル・プログラム

EFMにて各国の映画人と面会

フランスやドイツ、中国のプロデューサーやセラーとミーティングを行い、企画のプレゼンや今後の協業の可能性について話し合った。

ネットワーキングイベントへの参加

ネットワーキングイベントやパーティー等で、ヨーロッパの主要映画祭のプログラマーたちとつながることができた。特にベルリン・パノラマ部門のAna David氏は、『ポラリスが降り注ぐ夜』に対して強い関心を持ってくれた。

映画祭での作品鑑賞

ミーティングの合間を縫って1日2本程度の鑑賞を行った。聞いていた通り、ベルリンのプログラムは各国や地域の政治や社会が色濃く反映された内容が多いと感じた。また、業界の人だけでなく、多くの市民が参加しており、より公共性の高い映画祭であるという印象を受けた。



パノラマ部門プログラマーのアナ・デヴィッドさん。

印象に残ったプログラム

世界で最も歴史のある クィア映画賞のひとつテディ賞

テディ賞関連のイベントへ参加できたこと。テディ賞は部門の垣根を超えてクィア映画から選出されるアワードであり、今年は創設40周年を記念し、マーケット期間中にはほぼ毎日クィア映画に関するパネルディスカッションや交流会が行われた。特に印象に残ったのは、テディ賞創設者の一人、ヴィーラント・シュベックさんのお話である。1980年代後半、エイズ危機の最中でセクシュアル・マイノリティへの差別や抑圧が一層激しかった当時、クィア映画の制作と上映が草の根的に広がり、テディ賞がベルリン映画祭に公認されるまでの歴史を知ることができた。



「TEDDY 40」のパネルディスカッション。マイクを持っているのは、テディ賞創設者の一人で映画監督、プログラマーのヴィーランド・シュベックさん。

派遣プログラムを終えて

現在準備中の映画を今後国際的に展開していくための足掛かりとして、セールス会社や映画祭関係者を中心に幅広くネットワーキングを構築できたと思う。マーケットに足を運び、人に直接会って信頼関係を作っていくことや情報交換していくことの重要性を認識できた。また、テディ賞のイベントでは、世界のクィア映画コミュニティに触れる貴重な機会を持つことができた。今後、プロデューサーとして映画を製作していくにあたり、商業性や芸術的価値だけでなく、現実の社会や政治に根ざした作品を作っていきたいと改めて感じた。



テディ賞創設時、クィア映画の上映は、クィア関連の本を専門とするPrinz Eisenherz書店で行なわれていた。



全 辰隆 CHUN Jinrung
映画監督

秋田市出身、在日コリアン3世。2024年度に日韓合作短編映画『国道7号線』の監督・脚本・編集を務める。本作は各国映画祭で上映・受賞を重ねている。現在はユニジャパン主催「Film Frontier」支援のもと長編版の企画開発を進行中。また、東映との初の商業長編映画(日韓合作)の撮影を終え、2026年公開を予定している。

オリジナル・プログラム

EFMでのミーティング

EFMのジャパンプースにて、国際的に活躍する映画関係者4名(Pascal Diot, Eve Gabereau, Stefan Holl, Lorna Tee)と面会。自身の企画『国道7号線』の長編化に関するアドバイスを受ける。

各国のピッチング視察

EFMのSpotlight Onという国別の企画プレゼンイベントにて、韓国のKOFIC(韓国映画振興委員会)と日本のVIPO(映画産業振興機構)により選ばれたプロデューサーによる国際共同制作の企画ピッチングを視察。

ベルリンの史跡訪問

東西分断の歴史や痛みを学ぶため、ノルトバーンホフ駅、ベルナウアー通り、壁記録センター、イートストサイドギャラリーなどのベルリンの残る史跡や博物館を訪問。



Stefan Hollさんとのミーティング。自分の企画の説明をした後に、コメントをもらう。

印象に残ったプログラム

東西分断の歴史

映画祭やEFMはとても印象深かったが、東西分断の歴史を学べたのが特に印象的であった。ベルリンの壁の痕跡を残す史跡では、壁にまつわる個人的なヒストリーが記されているものがあり、それらは心情に訴える内容であった。現地で学ぶことにより、歴史が一層生々しく感じられた。すでに撤去された壁の跡にもその痕跡を遺す印が刻まれていて、歴史を忘れまいという街の気概を感じることができた。EFMのメイン会場であったマルティン・グロピウス・バウの目の前にも壁の痕跡が残されており、かつての東ドイツの地にあった宿泊ホテルから西ドイツの地にあった映画祭会場付近まで、自分が毎日自由に往復していたと気づいた時はとても感慨深かった。



ベルナウアー通りにある公園。ベルリンの壁が残されている。

派遣プログラムを終えて

長編映画の企画開発にあたり、国際的に活躍する映画関係者からのアドバイスが特に勉強になった。そしてSpotlight Onのような企画開発のピッチングが次の目指すべき目標になった。限られた時間で効果的に映画の説明をすることの難しさを実感したが、自分の課題に気づけたのは収穫であった。また、「歴史に翻弄された個人を映画の中で描く」ということを目標としている私にとって、東西分断に関する現地での学びもやはり大きな収穫になった。

そしてやはりベルリン国際映画祭で映画を鑑賞したこと自体が大きな刺激になった。上映後のリスペクトを表現する拍手や、フィルムメーカーと観客とのQ&Aのやりとりを見て、映画の力を再確認できた。いつか私も上映作品の監督として再びベルリンに訪れたいと思った。



SPOTLIGHT ON: JAPAN
Pitch Selection by Emerging
producers from VIPOの様子



SPOTLIGHT ON: SOUTH
KOREA | KOFIC's International
Co-Production Initiative &
Project Pitchesの様子



早川 史也 HAYAKAWA Fumiya

映画監督

早稲田大学卒業後、テキサス大学オースティン校で映画制作の修士過程を終了。米国ではリチャード・リンクレーター監督作品や他インディペンデント作品を中心に活動。2024年より日本に活動拠点を移す。これまで監督した短編作品はアカデミー賞公認のグアナハト国際映画祭やボゴタ短編映画祭等にて上映。現在、長編作品『残された空白』を企画開発中。

オリジナル・プログラム

EFMでのミーティング

中国のセールス会社Parallaxから、作品をセールス会社に提示する適切なタイミングについて話を伺った。また脚本ラボCine Qua Non Labでは企画開発の進め方について助言を受け、ポーランドの制作会社Under Ski TowerからはEU圏での企画開発費について説明を受けた。

ネットワーキングイベント

国別やセールス会社主催のネットワーキングイベントに参加し、プロデューサーや映画祭プログラマーとの交流を行った。具体的には、台湾ナイトでは日本・台湾を中心としたアジアの映画関係者と、D&I Afterworkではアメリカ及びヨーロッパの映画関係者と交流した。

映画祭公式選出作品の鑑賞

公式部門の作品及び、今回ミーティングしたセールス会社担当の作品を鑑賞。

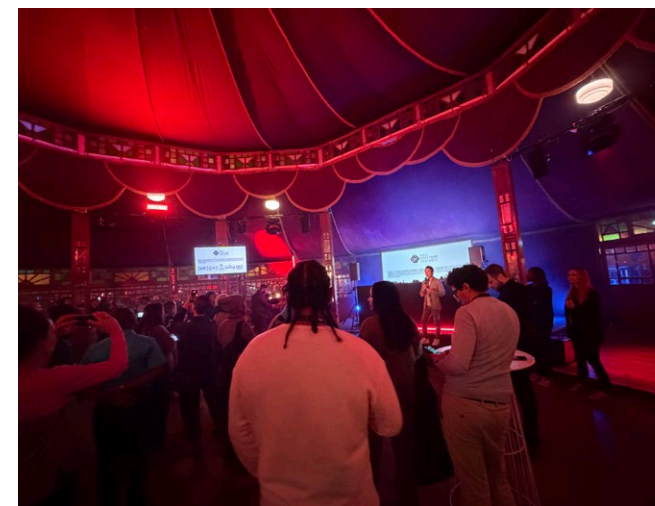


EFMのミーティングブースの様子

印象に残ったプログラム

国際映画祭でのネットワーキング効果

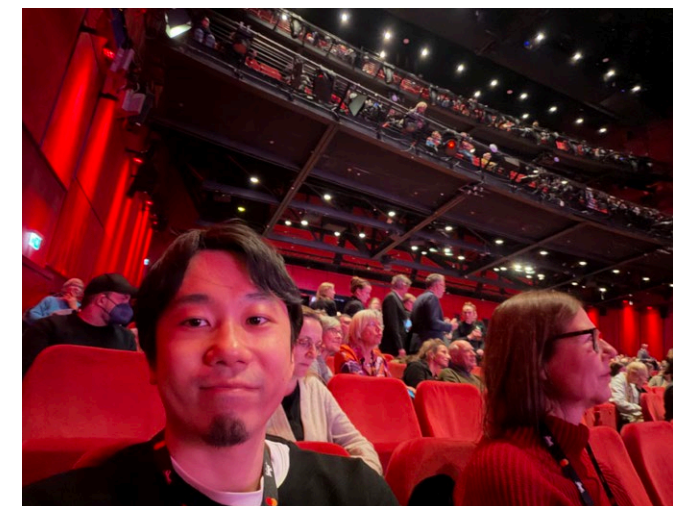
中国のセールス会社Parallaxとのミーティングが印象に残った。初長編映画の場合は企画の段階でセールスがつくことは稀であるが私の企画自体に興味を持ってもらったことが大きかった。また、ネットワーキングイベントにも呼んでいただき、そこでフォーラム部門のプログラマーからプログラムする作品の傾向について話を聞くことができたことも収穫であった。また、Parallaxが担当している作品で本映画祭のパノラマ部門でプレミア上映した『Shanghai Daughter』の主演女優であるLiang Cuishanさんと会って制作過程を聞くこともできた。作品を鑑賞した後だったので、作品を表と裏から知ることができ勉強になった。



ネットワーキングイベントの様子

派遣プログラムを終えて

今回、映画祭のマーケットに初めて参加し、ヨーロッパだけでなく、アジア、北米の映画関係者とネットワーキングし自分の企画について興味を持ってもらうだけでなく、次に何をすべきかのアドバイスを頂けたのが大きな収穫であった。また、以前に他の映画祭で出会った映画関係者の人とも再会し情報共有することができたのも良かった。映画祭の上映に関しては、部門別に作品を鑑賞することでそれぞれの特色の違いを知るだけでなく、プログラマーから直接話を聞くことができたのが収穫であった。映画祭の会場が街全体に散らばっていることもあり、地元の映画好きの人も観に来るなど全体的にアットホームな雰囲気であり、また参加したいと思える映画祭であった。



メイン会場での上映鑑賞

報告会

2025年度の事業を振り返り、報告会を実施。

派遣参加者15名が集まり、プログラムに参加した目的や派遣先での活動などを報告した。

海外の先駆的な作品や創作現場に触れたことで得られた気づきや、現地でのヒアリング、関係者との交流内容など、派遣参加者同士のディスカッションや、観覧者からの質問などを交え、盛況のうちに幕を閉じた。



【開催日時】

2026年3月12日(木) 17:00～19:30

【開催場所】

アーツカウンシル東京 5階 会議室

【一般観覧者】

約70名

【プログラム内容】

- ・派遣参加者による活動報告
- ・派遣参加者へのインタビュー
- ・交流会



総括—今後に向けて

3年度目となった今年は派遣先を拡大し、5カ所への派遣となった。初年度派遣したエディンバラ・インターナショナル・フェスティバル、ソウル・パフォーミング・アーツ・フェスティバル等パフォーミングアーツ分野、サンパウロ・ビエンナーレ、台北ビエンナーレといったビジュアルアーツのフェスティバル、そして新たに映画分野の人材育成として、ベルリン国際映画祭への派遣を行った。

日本の芸術団体、特に若手が海外での活動にチャレンジするにはいまだ経済的な障壁が高いが、申請者に今後積極的に海外での活動を目指す方々も多くなっており、派遣参加者が海外で様々な知見や経験を得る機会を提供できたことは、大きな成果といえる。

派遣先でのプログラムについては、必ず参加してもらうベーシック・プログラムと、派遣参加者が自らの問題意識により構成するオリジナル・プログラムの2種類で構成し、バランスよく取り入れることができた。特に、オリジナル・プログラムについては、派遣参加者の目的意識も高く、今後の活動へ具体的に活かせるネットワークづくりを想定しているケースが目立った。

アジア圏派遣への興味喚起と制度設計

派遣先毎の申請状況は、ヨーロッパ・北南米に対する申請数が多く、アジア圏に対する申請数は少ない。一度派遣されたら2回の派遣機会はないという現行の制度下では、遠方への派遣プログラムへの申請に偏りがちである。今後、芸術文化活動におけるアジア圏とのネットワークを構築すること・協働することの重要性や意義を鑑みると、アジア圏派遣の魅力の啓発もさることながら、1人が複数個所に派遣されることを可能とする制度設計の検討も必要である。

事業の拡大と長期的視点に立ったプログラムの検討

今回は映画分野への派遣プログラムが新たに立ち上がったが、今後も派遣対象分野として幅広い芸術分野を取り込むことが想定される。また、「芸術におけるアクセシビリティ」や「芸術と環境問題・気候変動」など、今日的な課題をテーマとした組み立てや、即戦力となる中堅人材を派遣対象とすることも想定される。今後、長期的な視点に立ち、将来的な東京都の文化政策として、東京の芸術文化関係者の海外とのつながりをどうバランスよく拡大していくか、どのような人材を育成していくのか、派遣先や対象者、プログラムの検討を進めることが重要である。

派遣後の活躍の場の提供

今後蓄積されていく派遣先とのネットワークや連携の充実、派遣参加者の経験の他の人々への共有、派遣参加者のその後の活動のアーカイヴ、また東京都や当財団の他事業との連携など、事業成果の考え方を整理していく必要がある。派遣参加者に都・財団の他事業での活躍の場を提供し、それぞれのキャリアをステップアップできるようなスキームの検討も求められている。今後さらに継続的に事業の実績を積み上げていき、国際芸術文化都市東京の基盤強化、国際的なハブ機能の強化につなげていくことが肝要である。

なお、各プログラム・アドバイザーをはじめ、プログラム立案・実施にご協力いただいた皆様に、心より深く謝意を申し上げたい。

公益財団法人東京都歴史文化財団
アーツカウンシル東京



「アートマネジメント人材等海外派遣プログラム」 2025年度実施報告書

2026年3月発行

主催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
報告書作成 アーツカウンシル東京活動支援部助成課支援デザイン担当
(石綿祐子、角南晴久、結城直子、澤田伸之、細田梨穂)
報告書編集 増田啓之(TARO inc.)

- 本書は「アートマネジメント人材等海外派遣プログラム」2025年度の実施内容に基づき制作・編集されたものです。
- 掲載された画像等につきましては、無断の転載をお断りします。
- 掲載された人物の敬称は省略させて頂いております。

